

# 混沌交差聖戰

雨叢雲之劍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

副題 交わった探索者

はーい作者はバカです

てことで今回はシキの住んでる世界で聖杯戦争しますちなみに原作欄はf a t e にしてますけど型月世界で行われていませんので神秘の秘匿とか無視されてます

そして今回は、Y o u t u b e で動画投稿しているY & R ゆっくり劇場という人が、出している東方戦乱この話は視聴者参加型になっていてその人たちに、私が聖杯戦争しませんかっと言ったらいいですよって言ってもらえたので有言実行しました。

許可も取ってます

では本編どうぞ

目次

プロローグ	1
召喚の章 第一巻	5
召喚の章 大2巻	9
召喚の章 代参巻	13
召喚の章 台IV完 終之巻	16
純白の章 第一巻	21
純白の章 第2缶	25
純白の章 第参官	29
純白の章 第IV艦	33
純白の章 第御館	36
純白の章 第6冠	39
純白の章 第NANA監	42
純白の章 第蜂巻	45
純白の章 第九巻	49
純白の章 第10巻	52
純白の章 第十一環	55
純白の章 第銃荷間	58
純白の章 第XII巻	61
純白の章 第重志巻	64
純白の章 第15巻	68
純白の章 第獣禄勘	71
純白の章 代17巻	74
純白の章 鯛中派地肝	77
混沌の章 第壹巻	80

混沌の章	第2艦	83
混沌の章	第三缶	86
混沌の章	台ヨン奂	89
混沌の章	大ご巻	91
混沌の章	ダイ六缶	93
混沌の章	弟那奈感	95
混??の章	第8巻	98
#??の章	第9△	101
#害の×	●・△	104
災害の×	●1△	106
災害の章	第2巻	108
災害の章	第3巻	111

## プロローグ

とある浜辺

シキ「ふうやつと焼き土下座の動画撮り終わったし帰るか」

と言いながら、帰ろうとしている人が一人いた、そうですあの面白半分で邪神三柱同時降臨なんてことをやらかした、あの馬鹿です  
そうして浜辺を歩いていると人が倒れていた

シキ「ありやこれ、この感じ俺のやらかしたやつ of 被害者かな、めんどくさい」

そう言いながらその子を背負うと自身の家に運んでいった

シキの部屋

??「オイシキ、そいつはなんだ攫ってきたのか、この犯罪者め」

白い壁にある大きなスクリーンから、ドアツプで顔を出してきた男がそう言ってきた

シキ「ぶちのめすぞ黎斗」

黎斗「ぶははは、この神壇黎斗大明神をぶちのめすだと、やれるもんならやってみるがいい」

と言うとシキがスクリーンに、手を突っ込むと自称神壇黎斗大明神の頭を掴みアイアンクローした

黎斗「痛い痛い私が悪かった、離せ」

シキ「分かればいい」

そう言つてコントをしていると

??「うーん、ここは、まさかまたなの」

シキが連れてきた子が目覚めたようだ

シキ「黎斗お前邪魔だから引っ込んでろよ」

真剣な表情でそう言うと

黎斗「わかった私は戻つてよう」

黎斗にもシキが真剣になったことを感じてことでスクリーンから消えていった

シキ「混乱してるとこ悪いが、お前気絶する前の記憶あるか？」

??「私、あの」

シキ「おつと自己紹介したほうがいいか？俺はシキ、苗字はなんか知らんけどない、そしてお前が邪神の関係者ってことはわかってる」  
??「!?なんでわかったの」

そう言うのと、殺気を出しながら警戒し出した

シキ「おおこわいこわい、そう殺気立つなよ、今回お前がここにきた原因は俺にあるかも知れねえんだから」

??「それを信じろって無理ね花封「何を思い何を知るか」

シキ「おつと」

その子がそう言うのと花びらが舞うとシキの力が減少し出した

??「油断大敵ね魔槍「門と鍵の狭間」

そう言うのとシキの周りに弾幕を放ちそのまま弾幕を放った。

??「ダメ押しに花封「散りゆく花の呼び声」

そう言うのと煙が晴れる前にさらに追撃を行った

??「これで終わりね」

シキ「そうとは、限らないぜ」

そう言いながら、無傷のシキが後ろから出てきた

??「嘘完全に当てたはずなのに」

シキ「ああ、当たったな俺が張った結界に」

??「邪神にも通じる攻撃なのよ、ただの結界で防げるはずがない」  
シキ「俺が使う結界は世界と世界の融合を防ぐためにある、どの世界にも存在する境界線そのものだぞ邪神程度でどうこうできるわけないだろ」

??「まさか」

シキ「実力差はわかって話を聞く気になったか？」

??「わかった一様信じるは、私の名前は星見 花音、倒れる前はヨグⅡソトースを退散させていたのだけどその瞬間次元が裂けて、気がついたらここにいたのよ」

シキ「なるほど、俺のところにもヨグⅡソトースが降臨してて、つい最近返したところなんだよ」

花音「そうだったんですか、大変だったんですね」

シキ「いやそうでもないさ、まあ別々の世界に同時にヨグⅡソトー

スが降臨した影響で相互干渉してこの世界に来たんだろう、お前が住んでた世界は俺が探しとくからしばらくここで住んでくれ、母さんにはもう話してあるし」

花音「わかったは」

そうしてしばらく立って、シキの規格外差を思い知った。邪神の力の一端と意識を、ぬいぐるみみたいな珍生物にしたりとか出鱈目すぎる

そしてシキが

シキ「時空が乱れて、なかなか見つからねえな原因俺だけど」

花音「そういえば、初めて話した時も、原因は自分にあるみたいなこと言ってたけど、どう言うこと？」

シキ「知らないほうがいいぞ」

??「それならオレが説明してやろうか」

そうしてきみの悪い表情をしたもう一人シキが話しかけてきた

花音「エボルトシキ何したの」

エボルト「それはだな、シキ「黙れ」グハ」

エボルトが何か話そうとした瞬間シキがエボルトを取り込み自分の中に入れ込んで口封じをした

花音「知らないほうが良さそうね」

花音はここ何日かでシキの扱いにだいぶ慣れたそうだ

シキ「お前の世界見つけるのにもうしばらくかかりそうだし、聖杯戦争しないか？」

花音「何それ」

シキ「どんな願いも叶えることができる願望器をかけた殺し合いだ」

花音「却下でめんどくさい、それに一般人に被害出るでしょそれ」

シキ「安心しろ舞台上で行われた殺しは、俺の能力で無かったことにしてやるよ参加者以外は、それに参加者は死んでも俺が作った脱落部屋でしばらくいてもらって終わった後、開放する、安全だろ」

花音「そうねそれなら安全な、でもめんどくさいわ」

シキ「ならお前が参加するなら、聖杯+俺が一つ言うこと聞いてや

るぞ  
」

花音「わかったやらせてもらおうわ」

シキ「そうこなくっちゃ」

シキはそう言っていると既に姿を消していた

花音「相変わらず神出鬼没ね、これからどうなることやら」



## 召喚の章 第一巻

しばらくすると、

シキ「隣町に聖杯セットしてきたぞー」

花音「隣町でするの？」

シキ「まあな、邪魔されたくないし」

花音「あなたみたいな出鱈目を、邪魔する人いるの」

シキ「いるぞ、母さんとか姉ちゃんとかカード屋のクソジジイとか、色々」

花音「半分が身内で最後の一人誰よ」

シキ「浜辺の近くにある、駄菓子屋みたいな店があるんだがそこカード屋なんだよそこにいる200歳越えのジジイが店主してんだよ」

花音「200歳越え!? 不死者なのその人」

シキ「いや違う、純粋な人間、本人曰く健康な食生活を気にかけて生きてきたって言うてるぞ」

花音「まさか、あなた以上の出鱈目な人がいるなんて思わなかったわ」

シキ「とりあえず英霊を召喚する準備するぞ」

花音「英霊って何？」

シキ「英霊ってのはな、型月って世界にいる世界に認められ、精霊の領域にたどりついた人間のことで、まあありてい言えば歴史上の偉人だな、ついでに聖杯戦争はな、この英霊を使い魔として使役し、代理戦争をやる戦いなんだよ」

花音「英霊についてはわかったわ、でもそんな存在なら召喚者に従う必要ないんじゃないの？」

シキ「ごもつとも、本来なら従う必要はないな、だが英霊にわな二つ逆らえない理由がある、一つ目がこの世にとどまるための楔としてマスターが必要ついでに魔力供給元でもあるしなマスターは、二つ目はこれだけ」

そういう時シキは自分の右肩を見せる、そうすると紅く歪んだ刺青

のような文様があった

シキ「これは令呪って言っていない英霊にに対する絶対命令権だ、これは三角あって三回命令できたり普通なら不可能なことを可能にすることができ、例えば、今すぐここに来いって令呪を使えばそこに契約した英霊を呼ぶことができる」

花音「それは凄まじいものね、うん？あれなんであなた、まだ英霊召喚してないのに令呪持つてるの？」

シキ「あれ言っただけじゃなかったわけ？お前に前合わせた下の住人あれ全員俺のサーヴァントだぞ」

花音「えっ、嘘」

シキ「ほんと」

そういうと、花音はしばらくフリーズして動かなくなった、シキは花音が動き出すまでに、召喚の準備を行い出した。

シキが丁度準備が終わった頃に

花音「ちよつと待って、なんであなたそんな平然してるのよ、呼ぶのに相当負担あるんじゃないの、しかも彼女たち相当強かったわよあなたどうやって呼んだのよ」

シキ「あれ、姉ちゃんとの罰ゲームで俺が一日で回復した分も含めて使える魔力を、根こそぎ使って召喚したからな」

花音「あなたのお姉さん一体何もんよ」

シキ「人類最古の人間の一人で禁術使って転生を繰り返しているぞ、まあ死んだ回数一回だけだけど」

花音「あなたの家族についてはもう聞かないわ」

シキ「賢明な判断だな、そろそろ英霊呼ぶぞ手始めに調停者のクラスのルーラーを呼ぶ」

花音「まだわからない単語出てきたわねそれは？」

シキ「ルーラーの説明だな、ルーラーわな聖杯戦争の監督役だな、他のサーヴァントがなんかしでかした時に動く、今回は俺はお前側にこっそりついてやるよ不正にならない程度にな」

花音「それありなの」

シキ「大丈夫だ問題ない」キリ

花音「心配になってきたわ」

シキ「気にしな―い気にしな―い」

そう言いながらシキは魔法陣を描きその前にたち一枚の紙を出した

花音「それ何？」

シキ「これか？俺っち考案誰でも簡単に英霊召喚できる紙だぞ、実際魔法陣も必要ない、所有者の遺伝子情報を取得出来れば誰でも使える優れもの」

花音「あつそう私も簡単にできるのね」

シキ「そういうこと、じゃあそーれ」

そう言つて紙を魔法陣に投げるとほのまま光るとf a t eのゲームのガチャの虹回転みたいなエフェクトが手出して

??「サーヴァント、ルーラー召喚に応じて参上いたしました。あなたが私のマスターですか」

シキ「イグザクトリー、そのとーり今回はあくまで監督役だから、頑張ろうぜ」

ルーラー「承知いたしました、して後ろの方は？」

シキ「今回の参加者の一人だ」

花音「星見 花音ですよろしくです」

ルーラー「よろしくお願いします、私は一旦消えておりますね」

そういうと、ルーラーは青い光の粒子になって消えていった

花音「今のは？」

シキ「霊体化、英霊は幽霊みたいに消えることができるんだよ」

花音「そうなのね、次は私がやればいいのね」

シキ「じゃあガンバ」

そう言つてシキは部屋から出て行った

花音「ほんとあいつ出鱈目ね、あいつの能力でこの空間もいきなり作り出すし、さっさと始めましょうか」

そういうと、自分の指に針を刺して血を一滴紙に垂らし、紙をシキみたいに投げ入れた

すると、シキみたいに虹回転し出した

?? 「こんにちは！私、アビゲイル アビゲイル・ウィリアムズ、私はフォーリナーあなたがマスター、なの？」

花音 「また知らない単語が出たわね、そうよ私がマスターちよつとまっつてね、聖杯戦争の監督役を連れてくるから」

そう言っつてシキのいる部屋に行つたのだった。

## 召喚の章 大2巻

花音がシキを呼びに行くのとシキは、手紙を複数枚持って外に行こうとしていた

花音「ちよつと、聞きたいことがあるから外に行くの待ってくれない」

シキ「うん、わかったぞなんだ」

そう言うのと部屋にシキが戻ってきた。

シキ「何が聞きたいんだ」

花音「それは、アビー」遅いは、マスター何してるの」ちよつと待っててって言ったよね」

アビー「マスター遅いのが悪いのよ、あんな暗い部屋で待ち続けることなんてできないわ、あの白い部屋は、楽しそうだったけど」

花音「それならそこで遊んで待つといてよ」

シキ「おっとそれは困る一旦下に戻るか」

シキがそう言つて指パツチンをすると下の階にある、白い部屋にいつの間にか変わっていた。

アビー「これどうなってるの、さっきまであの小さな部屋だったはずじゃないの」キラキラ

シキ「これが俺の能力の一つだな」ドヤ

花音「そんなことより、説明をしてちょうだい」

シキ「何が知りたいんだ」

花音「フォーリナーってクラスについてよ」

シキ「簡単に説明するとな、外宇宙もしくは、別次元より飛来した存在を指す」

花音「もうちよつとわかりやすく言ってもらえないかしら」

シキ「そうだな、邪神の力を持った英霊って思えばいいぞ」

花音「えっちよつと待つて」

シキ「だが断る」キリ

アビー「だが断る」キリ

花音「アビゲイルちゃんでもいいのかしらちよつと聞きたいんだけ

ど、いいかしら」

アビー「マスター、私はアビーでいいわそれで何が聞きたいのかしら?」

花音「あなた、どの邪神の力を持つてるの」

アビー「私は、銀の鍵そのものよ?」

花音「もう頭が痛い」

そう言っ頭を抱え出しているとシキが

シキ「じゃあ俺やることあるから行ってくるは」

花音「ちよつと待つ」

言い切る前に上にシキは行ってしまったそうするとドベラって声  
とガダンという音が聞こえてきた

花音「どうしたのよ」

と言っ急いで上がって外に出ると、シキが階段から転げ落ちて目を回して、そしてシキが持っていた手紙が風になびかれ飛んで  
いっっていました

アビー「大丈夫お兄さん」

シキ「やべー」

花音「一体何がやばいのよ」

シキ「さつき飛んで行っつやつがだよ」

花音「あれ結局なんなの」

アビー「そうよあれはなんなの?」

シキ「あれは招待状だ、聖杯戦争の友人を誘おうと思っ、例の紙  
の使い方を紙そのものに書いて配りに行こうとしたんだよ」

花音「それっ」

シキ「そうだ、一般人がマスターになる可能性がある」

花音「どうするのよ」

シキ「… もう放置だな」キリ

ドス ピチュン

ルーラー「マスター、せめて監督役なんだからしっかりせねばな、マ  
スターと私でこれからマスターになるものを監視する、しばらく家を  
開ける、ここを活動拠点にするがいい」

そういうと、シキを担いで手紙を追って行った

そして場面は切り替わる バアーン

とある会社

朝、出勤してる会社員の人ばかりができていた、その上空に2枚の宛名のない手紙が飛んでいてそのうち一枚が携帯を直そうとしている男のカバンに、もう一枚を後ろでその男を木の影から見てる女が気付き上手いことキャッチした。

そしてその紙を開けて読むと突然

??「ふふふ、これがあればワタシのダーリンを独り占めできるふふ会社なんて行ってる暇ないわね」フッフ

そう言っただけ自分の家の方に帰って行ったのだった

最後に一つだけ言っておく時は加速する バアーン (二回目ドン) 帰り定時

??「今日の仕事も終わりました、お先に失礼します」

上司「ああわかったお先にな」

仕事から終わった男が帰宅すると一か所吸い込まれそうな不気味な一角があった、その男はその一角に無意識に足を向けて入ってしまった、そして廃墟つき入って行くと目の前に「グギヤギヤ」と叫ぶ怪物がいた

??「なんだこれ」

そうして逃げようとするとその怪物が出口に先回りしてそのまま殴ってきたその男は避けれずこの一撃を喰らってしまったらそして怪物が「ぐぎやぎやぎや」と叫びながら男に近づくとその直後男がカバンを投げつけて上手いこと顔に当てて怯ませることに成功した

??「なんだか知らないが逃げるべきだな」

そう言っただけ上の階層に逃走した

??「ここで大丈夫だろ、ああいうやつは本能に忠実で、上まで登り切るだろう、このまま2階ぐらいなら飛び降りれるし窓から逃げるか」

そう言っただけ窓の方に行こうとする

ドゴーンと音が鳴って上からさっきの怪物が降ってきて地面に

叩きつけられて一回に戻ってきた

?? 「バカな」

相手は上まで登りきりそこに男が、いないことに気づきそのまま地面を叩き潰してきたようだった

?? (俺ここで死ぬのか、誰か助けて)

そう心で念じた時

?? 「これはとんでもない状況でよびだしましたな、マスター殿ここはワタシにお任せよ」

その声が聞こえたあと男の意識が落ちた

その廃墟の近くの木の上で一人の少女が

?? 「ふーんシキったら、なかなか面白そうなことするわね、私も参加させてもらいましょかね、それにあの呪霊は彼に任せれば問題なさそうだし」

そして少女が「朱雀」そういうと赤い機械のような翼が生み出されそして、シキの手紙を持ちながら飛んでいってしまった



## 召喚の章 代参卷

男に呼び出された男が、

?? 「マスター殿にああ言った手前、速攻で片付けるとしましょう」  
そういうと男の右腕に巻いてる包帯を外し

?? 「魂など飴細工よ…： 苦悶を零せ。」

そういうと、その時その包帯からものすごく細長い異形の手腕が伸び怪物の胸に手を触れさせた、その瞬間その手の中に赤黒い塊がありこれを砕きながら。

?? 「妄想心音」  
ザバーニークヤ

そうすると怪物が苦しみだし消滅して消えた。

?? 「ふむ、これは人の怨念のようなものが寄り集まって生まれた存在のようだな、ひとまずマスター殿を連れて帰るとしよう」

そうしてその男が、マスター殿と呼ぶ男を背負って消えて行った。  
場面は切り替わる

とある怖い女性の自宅

怖い女性 「フッフ、こんなに簡単にこんなことできるなんて、ほんと親切ね、じゃあ始めましょうか」

そうすると、女性の手にあつた紙に自分の血を垂らし投げると赤黒い回転をし出し

?? 「サーヴァント、キヤスター召喚に応じ、降臨したお前が俺のマスターか？」

怖い女性 「フッフその通りよさお私のサーヴァント私のダーリンのために聖杯を獲得して頂戴」

キヤスター 「了解した、まずは他の参加者を確認してこよう」

キヤスター心の中（めんどくさそうだなマスターに当たったな、手っ取り早く満足させてとつと立香のところに帰るか）

そう言つてそのまま姿を消した

怖い女性 「フッフ、待つてね嘉秀さん、この好美があなたの元に聖杯と共に迎えに行きますのでフッフ」

そう呟いてトリップしていた正直めっちゃ怖いですこういう時は

ちやつちやと場面転換しようしよう

場面変わってテントが無断で張ってある空き地、先程の少女が

少女「カグツチ帰ったぞー」

そう言っって着地すると

カグツチ「清明帰ってきたかー」

そういうと、某モンスターを引つ張って敵を倒すゲームのカグツチに似た青年が寝転がりながら首だけ出して返事をした。

清明「今日は、面白いもの拾ってきたぞ」

そう言っって、シキの手紙を見せた、カグツチはそれを見ると

カグツチ「清明、ガンバ、俺はパス」

そう言っってテントの中に戻ろうとすると

清明「別にいいよ、ここにスサノオ誘き寄せるだけだから」

カグツチ「あっはい」

そうしてカグツチは強制参加させられるのであったそして

清明「よし頼れる、ロリコン陰陽師を呼ぼう」

そう言っって道満が描かれた札を持ちながらシキの手紙に血を垂らし

清明「英霊でてこーい」

そういうと

??「お初にお目にかかります！拙僧、真名蘆屋道ま、清明「ロリコン撲殺キーク」ゴハー」ピチュン

清明「悪・即・斬」

カグツチ「ひどい茶番を見た」

そして今再び場面は切り替わるついでに時間も遡る

とあるお花屋さん

??「今日もいい天気ね」

そう呟く女性が一人いた、その女性が育ててる花に水をやっている  
と上空から手紙が飛んできた

??「これ魔法で作られたものね、宛名は書いてないはね、中身確認  
した方がいいわね」

そうして中身を確認し手紙の内容を読むと

??「これって、これが本当なら私の目標が叶うじゃないの、早速準備しなくっちゃ」

そう言っただけで店を閉めて英霊を呼び出す準備をし出した

そして準備が終わり簡易的な認識障害の結界を張り家の庭で手紙に血を垂らし手紙を投げたすると虹色に回転し出しそして

??「こんにちは！キヤスター、アルトリアと申します、実のところサーヴァントというものはよく分かりませんが、私の魔術なんかでお役に立てるなら遠慮なくお使いください」(第二再臨)

??「よろしくねキヤスター、私はムラサ キケマンよろしくね」  
キヤストリア「よろしくお願いしますマスター」

## 召喚の章 台IV完 終之巻

さて召喚会を最終章大詰めとなりました

現場のシキは、

シキ「いたた、頭砕けるところだつてぞルーラー」

ルーラー「そこまで本気でしていないぞ、それにマスターならあの程度では意味がない」

シキ「ひでえーまあいいやで、みてきた感じ参加者、飛んでいったやつのうち3枚確認できて、一枚紛失、あと2枚現状追つてる状態、一旦二手に分かれるぞ」

そう言つてシキはルーラーとは別の方に飛んで行つてしまった。

ルーラー「せめて返事を聞いてから行つてくさいよマスター」

そう言つてルーラーは初めに追つていた方を追うことにした。

ところ変わつてとあるビルの屋上

そこに小柄の女性が一人いた

??「この世界は相当歪んでるわね、まずは大きな神の力で並行世界の強制的に幹になつてるわねそれに別の何かで他の世界と融合しているは、よくもまあこんな状態で一つの世界として存続できてるわね、極め付けにはこの世界最近邪神、それも最高位の3柱が同時降臨した気配がするわ、ほんとなんで滅んでないのかしら、元凶を探してこの問題解決しないとうん？なにあれ」

そう言つて、上空に浮いていた手紙を掴むと

??「これ魔法で作られてるわね、しかもこんな私の私みたことない」

そう言つて手紙を開けて中身を確認すると

??「これよ、これなら世界を救えるかもしれないわ」

そう言つてその場で手紙に血を垂らし手紙を投げるといつも通り虹回転し出し

??「俺はアーチャー、ナポレオン！可能性の男、虹を放つ男。勝利をもたらすためにやつて来た、人理の英雄だ」

??「よかつた、狙つた通りに召喚できたわ、これ一般人でも扱えるような代物なのにこんなことができるなんてなんで上空に飛んでた

のかしら」

ナポレオン「嬢ちゃんが俺のメイトルか？」

??「その通りよ、それと言いくいんだけど、今回はあなたにはある程度立ったあと世界のために死んでもらうわ」

ナポレオン「そりやあ穏やかじゃねえな、訳を聞いても」

??「別にいいわ、この世界は今相当不安定なのよ、だからあなたの不可能を可能にする力、可能性の光を、あなたが死んだ後にも発動する仕掛けを作ったわ、それでこの世界を維持するのそれにあなたが生きてる間は好きにしてちょうだい聖杯が欲しいなら取りに行けばいいし、今を楽しみたいならそうすればいい」

ナポレオン「なるほどな、わかった了承しよう世界のためとなっちゃ俺の命しつかり使ってくれ、代わりにメイトル、君の名前を教えしてくれ」

??「おかしな人ねいいわ、教えてあげる私の名前は天星　希空よこれからしばらくよろしくね」

ナポレオン「ああよろしく頼む、それとそこにいるやついつまでみてる気だ」

ルーラー「おや気づいていたのかこれは驚いた」

希空「気づいてたわ、あの紙を追ってきた人いえあなた英霊ね誰の差し金かしら」

ルーラー「私のクラスはルーラーです、あくまで私のマスターの不手際でこうなってしまったので、拾った参加者の確認をしていただけですよ」

ナポレオン「本当か？」

ルーラー「ええ本当ですよ、おっと私のマスターに呼ばれたのでいきますあなたたちの存在は認識しました、受付とかは必要ありませんでわ」

そう言うルーラーは消えていった

希空「厄介なことになったわね」

素晴らしいながビルから飛び降り別の場所にナポレオンと向かうのだった。

すこし時間は遡りとある神社

上空に空間の歪みそこから二人の青年と少女が落ちてきた、そしてこの神社の巫女は

巫女「私の感が言ってるはね面倒ごとが起きるってとりあえず恋に連絡した方がいいかしら」

そうして懐からスマホを出そうとした時

??「うーん、ここどこだてかまた聖杯に吹っ飛ばされたか」

と赤銅色の男の方が起き上がってそうつぶやいていた

巫女「悪いけど、起きたんならとりあえずそつちの子こつちに運んでくれないかしら」

??「えっあつわかった」

そう言うと一緒に倒れていた白髪の少女を抱き抱えると、巫女の人に案内されそのまま神社の中に入っていった

そうして巫女の方が

巫女「わたしは安倍 聖子よろしくであなたたち何者なんで上から降ってきたの教えなさい、拒否権はない」

??「ああわかった、俺の名前は衛宮 士郎だ、気がついたらここに、

聖子「はい、ダウト」いや、人の話最後まで聞けよ」

聖子「だって明らかに嘘だからよ、私の感がそう言ってるわ」

士郎「いや感って」

聖子「あなた、魔法使いでしょ、それも異世界から来た」

士郎「!?なんでわかったんだ」

聖子「似たようなんよく見かけるからよ、そのまま移住してる奴もいるし」

士郎「この世界なんでもありなんだな、わかった改めて話すよ、俺たちは自分の部屋にいたんだが、友人が俺の管理してる聖遺物を勝手にいじって爆発したんだ、そうしたらここにいたんだ」

聖子「今回は嘘はなさそうね、とりあえずこう言うことの専門家呼んでくるから待っていてちようだい」

そう言うの外に出て飛んで行ってしまった。

士郎「行っちゃった、なんの隠蔽もなく飛行って神秘の秘匿もへっ

たくれもないな、それに今回は中身からになってるけどこれあるしな」

そう呟きながら自分の胸から黄金に輝く器を出した、それをいじっている

??「ふにゃ、あれここどこ?」

士郎「ここは聖杯で飛ばされた世界の神社だぞソル」

ソル「あっそういえば、また夜空がやらかしたのよね」

そう言っ二人とも遠い目をしてると

聖子「専門家連れてきたはよ、後面白そうなものも奪ってきたわ」

士郎「早くなってか奪ったってなんだよ」

聖子「これよ」

そう言っトシキの例の手紙を士郎に見せた

士郎「これって!?!まさか聖杯戦争だと」

聖子「そうよ、シキが安全保障してるみたいだから安心して殺しあえるらしいわ」

士郎「どう言うことだよ」

シキ「その説明は、俺がするぜ」

そう言っト、シキが入ってきた

シキ「手始めに自己紹介をしようか、俺はシキ苗字は知らん今回の聖杯戦争の監督役兼ルーラーのマスターだ」

ソル「何のために聖杯戦争開いたの」

シキ「そりゃあ俺んどこにいるやつが暇してそう(してません)だったから遊び半分で」

聖子「それで前ひどい目見たばかりでしょあいつに報告しようかしら」

そう言っトシキは見事なジャンピング土下座をして

シキ「スンマセンでした、だから姉ちゃんには言わないでください(涙)」

聖子「まあいいわ、どうやら先客もいるみたいだししばらくここで暮らしていいわ、それに暇ならその聖杯戦争参加すればいいわ」

そう言っト聖子は奥の部屋に入っトいった

シキ「じゃあ俺もお前らが参加する方向で進めてくるわ、じゃあの」  
そう言つて帰つていった

士郎&ソル「ええー」

士郎「参加するか？」

ソル「参加するしかないでしょう」

そう言つて二人ともため息をつきながら手紙に二人の血を垂らし  
て外に投げた。

そうすると

??「私を、呼ぶ者は誰か。そうか、お前らか、承知。ここはそう言  
う世界なのだな、なば私はこう言おう、私はロムルス・クイリヌス！  
光の槍如き腕を振るう、人理のサーヴァントである」

役者は出揃つた、これより聖杯戦争が幕を上げる



## 純白の章 第一巻

役者全て舞台上の上に揃った

夜にシキが、満月の光の下で令呪を掲げてある仕掛けを使用した

シキ「舞台を整え全ての役者は揃った、さあ聖杯戦争を始めよう。聖杯戦争の主権者にして監督役、そしてルーラーのマスターのシキが令呪を持って全マスターに開催を宣言する。ここではあらゆる非道、あらゆる外道、この監督役に見つからないあらゆる不正を許そう、全力で殺し合うがいい、そしてこの血に塗られた戦いの勝者に聖杯を授けよう存分に戦うといい以上」

そう言い終わるとシキの右手にあった歪んだ令呪の上にあつた模様一つ消えていた

ルーラー「今のはなんでしょう？令呪まで使用した儀式のようでしたけど」

シキ「あれは全マスターの令呪を通して開催を宣言したんだ。令呪は元々監督役の俺には必要ないしそれにこうすれば」

と言いながら自分の右手に左手を重ねて離すと、消えていた令呪が復活していた。

ルーラー「それズルでしょ」

シキ「俺の能力の力だから問題ないそれにあらゆる外道を許すつて言つたんだから良いだよ」

ルーラー「物はいいいようですね、やれやれですよ」

そして二人はその場をさった。

自宅に戻ると、

花音「シキさっきの何？」

とい聞いてきた花音がいた

シキ「開催宣言をカツコつけながら言ってみた」

花音「あつそう、でもうこれから聖杯戦争が始まったてことでもいいのかしら？」

シキ「それでいいぜ、それと初めに狙うならこいつがいいぞ」

シキはそう言うと、一枚の写真を見せた

花音「この子は？」

シキ「ルーラーが見つけたアーチャーのマスターだ、こいつが今の優勝候補の一人だ、様子見がてら仕掛けたらどうだ」

花音「直訳すると、自分が興味を持ったから仕掛けろってことね、まあここで世話になってる以上向かってあげるわ」

そう言うとき花音は、外に出ていった

聖杯戦争の舞台となった隣町で

希空「さっきのシキってやつが今回の元凶かしら？あなたは思う、アーチャー」

ナポレオン「まあ令呪にあんな細工をしてたんだから相当な実力者だろうな」

希空「とりあえず、今日の宿になるとこを見つけてみましょう」

ナポレオン「そうだな、うん？どうやら早速きたようだが、希空」

希空「そう見たいね、出てきなさい」

そう言うとき、

アビー「ああマスター、バレちゃたわ」

花音「別にいいわ、別に隠れてたわけじゃないし」

希空「で、あなた達はマスターとサーヴァントでいいのかしら？」

花音「ええそうよ、恨みはないけどこの聖杯戦争の初めの犠牲者になつてちょうだい」

そう言うとき同時に、複数の弾幕を希空目掛けて放った、それを希空は、

希空「フレイラ×100」

そう言うとき炎を出し物量で押し返し花音にぶつけた。煙が晴れると、アビーの後ろから触手が出てその触手で炎を遮り防いでいた。

花音「へえーやるねー、フォーリナーあつちのアーチャーの相手をしてくれないかしら？」

アビー「わかったは、マスターが言うなら私頑張る」

そう言うときそのままナポレオンを触手で弾き別の場所に行ってしまった

花音「以外ね防ぐと思ってたけど」

希空「別にあのサーヴァントの方が厄介そうだったし丁度いいわ、とりあえずあなたには聞きたいことがあるから行動不能になってもらうわ、それにあなたにもよ」

そう言っつて電柱の方を見ると

シキ「ありや、俺にも気付いていたか、俺はあくまで監督役だから戦闘には参加しないぜ、それに俺に攻撃するつてことは一様ルール違反だぜと忠告しとくぜ」

そう言っつてシキは、姿を消した

希空「まだこの辺にはいるみたいね、とりあえずは、あなたが先ね」  
花音「そう言うこと、私も聖杯戦争がどう言うものか試させてもらうわ」

今度は希空から仕掛けてきた、

希空「フレイア×100&アクタタ×100複合、ブラストバースト」

そう言っつと先程の炎と水を生み出し混ぜ合わせる放つと花音の目の前で突然爆発した。

花音はすぐさま避けたが、さらにそこに向けて

希空「フレイア×500ウインバラ×500ウッド×1000複合リーフブラストストーム」

そう言っつて竜巻を作り出しそこに炎を火力源に木を火力燃料とした魔法を放ったそこから爆発し煙を上げた、煙が晴れるとそこには花びらが花音を囲うように待っていた

花音「今のは、危なかったは、あなたの實力は大体分かったし今回はここでおしまいにしましょう」

希空「私も別に構わないわ」

花音&希空「てことで死に晒しなさいシキ（ルーラーのマスター）」  
そう言っつて希空はフレイア・インフェルノを放ち、花音は特大のレーザー弾を隠れていたシキに放った。そうしてシキは、

シキ「ちよまつ」ピチュン

直撃して倒れた、それをルーラーが回収して消えていった

花音「迷惑をかけたわね、続きはまた今度、フォーリナー帰るわよ」

アビー「わかったわ、マスター」

そう言うのと花音達も帰っていった

ナポレオン「あの嬢ちゃん、俺だけじゃ抑えるので精一杯だったすまない希空」

そう言いながらボロボロのナポレオンが来た

希空「別に構わないは、アーチャー聖杯戦争はこれからよ、最後に勝てば問題ないわ。それにそもそも私達はまず勝つ必要もないしね」  
ナポレオン「そうだったな、よし気分を入れ替えて宿探し再開するか」

希空「そうね」

そう言って二人も歩いていった。

## 純白の章 第2缶

時は進み朝、ある男の家

?? 「うぐ、あれここって」

そう言つて目が覚めると

?? 「ああ起きられましたか、マスター殿」

そう言つて入ってきたのは、彼を助けた男だったら

?? 「お前誰だ!？」

?? 「おつと、私としたことが失礼しました、私マスター殿サーヴァントアサシンのハサン・サツバーハと申します。以後おみしりよきお」

?? 「サーヴァントってなんだ？」

ハサン 「それについては…」

面倒なんでカクカクしかじか四角いムーブ

ハサン 「と言うわけですよマスター殿」

?? 「わかつた、要するにお前らサーヴァントを使った代理戦争を行うってことだな、巻き込まれた以上俺も自衛をする必要があるな、聖杯がどんなにすごい物か知らないが、こうなったら以上参加する、俺は鈴野 嘉秀だ。よろしく頼む、アサシン」

ハサン 「こちらこそよろしく頼みますよマスター殿」

嘉秀 「早速悪いんだが、俺は会社に行つてくる。その間に俺の会社近くで俺の警護をしながら出来るだけ敵の情報を集めてくれ、無理する必要はない、俺に警護が必要ないと判断した場合は、範囲を広げてくれてもいい頼めるか」

ハサン 「指示が的確でわかりやすいですな。心得ました。でわ」

そう言つとハサンは姿を消した

嘉秀 「よし、俺も会社近く行くか」

そう言つて熹秀もう会社に行くのだった。

場所は変わって禍野

晴明 「陰陽パーンチ」

?? 「グハー」

清明は誰かと戦ってるようだった（一方的に殴られてる）

カグツチ「がんばれスサノオお前ならきつと勝てるぞ〜（適当）清明そこだ、そこでもっと腰を入れて拳を放て（真剣）」

スサノオ「オレだけ適当すぎだろそれ」

そう言いながら一本一本が大剣呼べるぐらいの片刃の双剣を使いながら清明と戦ってる青髪の神創の婆娑羅また吹き飛ばされる

道満「拙僧は、一体何を見せられているのでございましょうか？」

清明「スサノオで弄んでる私の姿？」

スサノオ「自分でも疑問系になってるんじゃないやねえよ」

そう言っただけで吹き飛ばされたスサノオが戻ってきた。ついでに道満を殴り飛ばしていた

清明「おおくよく飛んだね」

カグツチ「仮にも自分のサーヴァントの扱い雑すぎないか」

清明「いいーじゃん別に道満だし」

スサノオ「てかそのサーヴァントってなんだよ」

清明「カクカクしかじか四角いムーブってことだよ」

カグツチ「そんなんでわかるわけないだろ」

スサノオ「理解した、要するに強い奴が集まってるってことだろ」

カグツチ「なんでわかるんだよ（やろうと思えば理解できる人）まあそう言うことだな」

スサノオ「じゃあ行ってくる」

そう言っただけで双剣を白い剣に戻しそのまま龍黒点を開けて現に出ていった

清明「よしこれで、戦争を引つ掻きまわせるそれに相手の力量も大雑把に把握できる一石二鳥だね」

道満「ンンンなかなか恐ろしいことを考えますな、この世界の清明」

清明「別にいいじゃん、君も協力してくれよ賭けに勝ったの私だし」

道満「そうですね、拙僧は中身だけならあなたのこと好きですよ見た目がもう少し成ちよ、清明「勾陳」ゴフオー」

清明の足が獣の足のようになり、一度足を地面を踏むと、地面が盛り上がり足にまとわりつき、そしてそのまま清明は道満の顔に蹴りを

入れた。

カグツチ「あいつバカだろ」

晴明「よし悪は、片付けた。そろそろ帰らないと陰陽師が来そうだし帰ろう」

カグツチ「へいへい」

そうやって道満の残骸を持ちながら禍野から出ていった。

場所は現

スサノオ「さてと一般人にちよつかいかけるのはよくねえしどうしたものかね」

無計画で外に出てきたバカだった

??「ねえあなたこの人知らない」

そんなことをしているとスサノオに声をかけてくる少女がいた

スサノオ「ああんなんだよ、オレ忙しいだが」

と喧嘩口調で聞き返してみると、そこには晴明にそっくりな少女がいた（晴明は髪の色が純白でこの子はどこにでもいそうな黒髪です）

??「この人見たことありませんか？」

少女はスサノオの威嚇を無視しそのまま自分に何かの写真を見せてきた。それを見てスサノオは、口角を上げて

スサノオ「ああ知ってるぜただし、オレに勝てたら言っつてやるぜ、晴明の子孫」

そう言うと、周りに水龍を作り出し上空に飛んでいった。少女も一気に踏み込み飛んでいった。

電気の付いていないビルの上に着くと

スサノオ「こちら辺でいいか、さあ始めようぜ」

と言いなながら白い剣を出した

??「できれば、タダで教えて欲しいのだけど」

スサノオ「無理だな、オレは戦鬪狂だからな」

??「そうねならしやうがないわじゃあ」

と言うといつのまにかスサノオの顔に蹴りが入っていた

スサノオ「いてて、今のはオレとお前の距離をゼロにしたのか、この感じお前呪術師か」

??「すごいわね、私の原点回帰極点呪術を一回で見破るなんてあと私は呪術師じゃなくて陰陽師ね」

スサノオ「陰陽師の力と呪術師の力わな全くの別門だぜ」

??「そんなことは、知ってるわ、私の一族は元々陰陽師兼呪術師だったのよ」

そう言いながら再びいつの間にか、スサノオの腹に拳が入っていた。だがスサノオは、微動だにせずそのまま剣を振り下ろした。動かないことに驚き反応に遅れて避けきれず剣にあたり吹き飛ばされた。そしてスサノオは八首の蛇を水で作り出しそのまま向かわせ叩きつけた。そして確認するとかろうじて意識のある少女がいた。

??「なんで」

スサノオ「お前は磨けばいいもんになると思ったからな、名前を教えろ覚えといてやるよ、そして次会った時またオレと戦えそれに勝てれば晴明の居場所教えてやるよ」

??「私は、蒼霊 零よ」

スサノオ「そうか零楽しみに待ってるぞ」

そう言うとスサノオが消え去った

零「五条 悟と互角に戦えるからって驕ってだのかしら」

そう言いながら立ち上がり、零また消えていった。



## 純白の章 第参官

現状衛宮士郎は、面倒ごとになっている。具体的に言うとなら神社の中に元人類悪がいるのです

キャスター「どうした、衛宮士郎俺のマスターの情報を教えてやったのに不満でもあるのか」

と笑いながら普通にマスターを裏切ってる奴がいる頭が痛い

ソル「士郎は別に、その情報に不満があるわけじゃないんだよ。目の前に元人類悪がいてそいつがマスターの情報をペラペラ喋ってるせいで頭が痛いだけだよ」

キャスター「なるほど、確かに頭の痛い問題だな、だが俺はこう思っている、おれのマスターと同盟を結ぶて言う形で監視をしてほしい」

士郎「それってどう言うことだよ、ラグナロク」

ラグナロク「さっき言った通りマスターは、えらくアサシンのマスターにご執心の様子だ。その過程でどんなに被害が出ようともない」

士郎「また頭が痛くなってきたぞ」

ラグナロク「そう言うことだから考えといてくれ」

そう言うとならラグナロクと言われたキャスターは、スキマを開きそのまま消えていった

士郎「あいつ、面倒ことだけ置いていきやがって」

ソル「まあ仕方ないよ、むしろ相談に来て貰えただけありがたいでしよ」

士郎「ものは考えようだな、俺たちも出ようか」

ソル「そうね、久々のデートと洒落込もうか」

そう言うて二人は神社から出ていった

場面はラグナロクに切り替わり

ラグナロク「本当に面倒だな、あの女」

そう呟きながら、例の男とアサシンにバレないように監視していたラグナロク「この気配、はあマジかーこの聖杯戦争適当すぎだろ、キャスタークラスが二人いるって」

そう言いながら、キャスターとそのマスターの監視に切り替えた

ムラサ「うん？今誰かに見られてたような」

キヤストリア「えっ、誰かに見られてましたかマスター」

ムラサ「多分、でも今は、消えたみたい」

キヤストリア「そうですか、サーヴァントなのに気づけなくて申し訳ないです」しよぼん

ムラサ「大丈夫だよ、さあ行こう」

キヤストリア「はい、わかりやした」

そう言つて二人は、拠点に帰っていった。

場面転換激しいね再び場面は切り替わる

??「なんで吾が、参加していない聖杯戦争の監督役をせねばならん」

ノア「それ俺に聞かないでくれ茨木はあ」

そう言いながら、シキの命令で働かされている二人がいた。そこに、

士郎「おい、お前がそのサーヴァントのマスターか？」

と後ろから声をかけられた

ノア「違うが」

士郎「じゃあなんでサーヴァントと一緒に行動している」

茨木「吾はあいつの命令で、で仕方なく聖杯戦争の監督役の手伝いをしているのだぞ、人間うん？貴様人間か？」

ノア「一様人間だぞ。邪神に魅入られてしまつてるみたいだがな」

そう言つてノアは聖剣ソードライバーに紫色と禍々しさを追加したようなドライバーを手にとって

ノア「茨木、ちよつとこれの性能調査も含めて戦闘する、これやるから適当な駄菓子屋で時間潰せ」

そう言つて茨木に3000円を渡してドライバーを腰に当てると

ドライバー「魔剣ソードライバー」

ノア「そしてこれな」

そう言つて黒い小さな本を出しページを開くと

ライドブック「エンシェントドラゴン『かつて、一人の王が全てに

裏切られそれでも彼に唯一残つたのは邪竜だった』」

その本をドライバーに嵌め込み

ドライバー「暗軀抜刀！エンシエントドラゴン！『暗軀一冊！王と寄り添う暗黒の龍と軀体剣暗軀が交わる時、闇を背負いし王が世界を切り裂く』」

そして、ノアは黒色のセイバーに変身した。

ノア「さて、お前戦つてもらおうか？」

士郎「俺を説得する発想はないのか」

ノア「ない（断言）」

士郎「仕方ない、投影開始」

そう言つて黄金の剣を作り出し構えた

ノアから動き出した正面から切りかかってきた。士郎はそれを受け止め弾きそのまま切り返した、何度か斬り合い。

士郎「悪いが決めさせてもらう、選定の剣よ力を、邪悪をたて、『勝利すべき黄金の剣』」

ノア「甘い」

そう言つて暗軀をドライバーに納刀し

ドライバー「暗軀居合い！読後一閃！」

ノア「暗黒の斬撃！」

そう言つて暗軀を抜き黒い斬撃で勝利すべき黄金の剣を弾き飛ばし、そしてドライバーに暗軀を納刀して

ドライバー「必殺読破！ドラゴン一冊切りゼ！ブラスト」

ノア「漆黒の剣！」

そう言つて暗軀を抜刀してあろうことか暗軀を槍投げのように投げ、後ろから黒いドラゴンを出し、仮面ライダー竜騎のように蹴りを暗軀に向かつて放った

士郎「くそ、熾天覆う七つの円環」

そう言つてピンク色の7枚の花弁でできた盾を作り出し衝突した。そして出てきた士郎はなんと、髪の色が一部白くなり身体中に黒い刺青のようなものが出てきていた

ノア「こっからが本番か？」

士郎「あんまり使いたくなかったんだがな」

そう言つと、黒い刺青から触手のようなものが出てきて戦闘態勢に

な  
っ  
た。  
。

## 純白の章 第IV艦

ノア「さて、第二ラウンドと行こうか」

士郎「面倒だが片付けさせてもらおうぞ」

そう言つて、二人がぶつかる直前ピロピロロンつと音が聞こえノアが変身をといた。

ノア「はいノアですー」

シキ「お前何してんねん」

ノア「喧嘩売られたから買ったただけだけど」

シキ「茨木から聞いたぞ、お前が説得をはなからしなかったって」

ノア「なん…：…だと」

シキ「てことで上見てみるよ」

ノア「上？」

そう言つて上を見ると

??「任せなマスター、ここが命の張りどころつてね。野郎ども、出番だよ！嵐の王、亡霊の群、ワイルドハントの始まりだ!!」

上には海賊船とその上に顔に傷のある女がいてノアに向かって宝具を容赦なく放った

ノア「ちよつおまタイ」ピチュン

??「悪いね、マスターの頼みでこいつ回収しにきたから。何かある場合はマスターのシキに聞きにきな」

そう言つて女は船に戻つて帰つていった

士郎「嵐がさつたな」

そう言つて元の姿に戻り別の場所に行ったのだった

ところ変わつて衛宮ソルは、

花音「ねえあなた、なんでこんなところにいるのかな？」

ソル「別にただの散歩だけど」

花音「嘘を吐くんだつたらもつとマシな嘘をつこうよ、こんな会社とかしかない場所で散歩つてないでしょう」

アビー「マスター、その人多分受肉したサーヴァントよ」

花音「また知らない単語が出たわね、まあいいわ、少しあつちでお

茶しない」

そう言って喫茶店を指した

ソル「仕方ない、いいよ僕も言っておける」

そう言って3人は喫茶店に入っていた

ソル「僕になんのようかな？」

花音「まずはあなたがなんのサーヴァントか教えて欲しいのだけ  
ど」

ソル「悪けど僕は、今回ランサーのマスターだよ」

アビー「嘘よ、サーヴァントがマスターをするなんてできないもの」

ソル「これを見たらわかるんじゃないかな」

そう言くと、右手を見せるとそこには左半分だけのハートの形をし  
た令呪が刻まれていた

花音「あなたがマスターってことは、わかったわ。改めて聞くは、あ  
なたなんであんなところにいたの？」

ソル「わかったは、あそこの会社にあサシンのマスターがいるのよ。  
一目見た感じ一般人ぽかったから話を聞きにきたのよ。多分そろそ  
ろ」

ロムルス「マスターよ、連れてきたぞ」

そう言ってロムルスが喫茶店に嘉秀とアサシンを連れて入ってき  
た。(アサシンは霊体かしてます)

嘉秀「こんなところに二人のマスターが俺を呼んで何の用だ」

ソル「そっちは知らないけど僕は、君が何故巻き込まれたかを聞き  
にきただけだよ」

花音「私は、他のマスターを探してる時にそっちの子を見つけたか  
ら来ただけよ」

嘉秀「なるほどな、明らかにこっちが不利だから従おう、俺の名前  
は鈴野嘉秀だ。巻き込まれた理由は、アサシンいわく人の怨念が集  
まってできた怪物に襲われた際何故かアサシンが呼ばれて参加する  
ことになった」

ソル「ものすごく悲惨な参加方法ね。誰かさんを思い出すわね。あ  
なたが望むなら私たちが保護すけどどうする？」

嘉秀「いやいい、俺自身聖杯は必要ないけどアサシンは命の恩人だ、アサシンが聖杯を欲しいみたいしな手伝ってやってるんだ。お前たちとは敵同士だからな」

花音「だったら、私と同盟を結ばないかしら」

嘉秀「どういことだ？」

花音「最後に私たちが残るまでお互いの不可侵条約と定期的な情報共有を行うことを条件に同盟を結ぶのよ。監督役は、マスター同士が手を組んではいけないって言ってないし1対多数に持ち込んだ方がいいでしょ」

嘉秀「そっちのことが信用できないから却下だ」

花音「ならこれならどうかしら。フォーリナー令呪を持って命ずる同盟者が同盟破棄の条件を達成しない限り同盟者とその関係者に対する害意ある行為を禁止する」

アビー「マスターそれって」

花音「この条件を呑むなら私たちは何もしないわ」

嘉秀「そこまでされたならその同盟を呑もう」

ソル「なら私も参加さしてくれないかしら？」

花音「別に構わないわ」

そう言って3陣営の同盟が結成されたのだった

## 純白の章 第御館

花音と嘉秀とソルの同盟が結ばれている間に士郎は、

士郎「ここがラグナロクのマスターの家か」

ラグナロクのマスターの家の前に来ていた。

そして呼び鈴を鳴らした。

好美「はい」

とそう言いながら扉を開けると、そのまま拳をストレートに打ってきた。士郎はそれを受け流し体制を崩させ、拘束しようとする、それより早く体制を立て直しました今度は顔にストレートを打ち出した。それを完全に受け止めて、

士郎「あなたのサーヴァントとは知り合いで同盟を申し込まれる。できれば話し合いをしたいんだ落ち着いてくれないか？」

好美「あら、私のサーヴァントの知り合いなのねいいわ、入ってちょうだい」

そう言つて家に招き入れた

士郎（ラグナロクに聞いてた通り目的のためになんでもするタイプだな、ラグナロクを自分の所有物みたいと言つてる時点でヤバそうだな）

そう考えながら、家に入つていった。そして、

好美「それで、同盟って具体的にどんなことすればいいのかしら？」

士郎「簡単だ、お互いの不可侵条約、お互いに利益がある時の協力関係これだけでいい、こっちは必要以上に関わる気はない、代わりにそっちも最後の時まで干渉しないわかりやすいだろ」

好美「わかったわ、それでいいわ、これで終わりかしら」

士郎「ああ、これでいい、長居するのも悪いし帰らせてもらう」

そう言つて家から士郎は出ていった

好美「ふふふ、精々利用してあげるわ、頑張つて頂戴ねふふふ」  
場面は変わる

シキ「やつと見つけたぞ晴明」

晴明「やつと気づいたの遅いよシキ」



そう言つて清明とシキが睨み合つていた。

道満「あの人は、どちら様ですか？」

カグツチ「今回の監督役兼清明の子孫（クローン体）の友人の弟だぞ」

道満「ンンンなるほど、つまりあの方をこちら側に引き入れればマスターの目的を達成できるとことですね」

カグツチ「そうだな、まあ結構怒つてるみたいだけどな」

そう話していると、ドゴーンと二人が戦い出した。

清明「へえー初めっからそれ使うんだ」

シキ「お前相手に手加減は必要ないからな」

シキは、赤黒く見たもののSAN値を削るような剣のようなものと同じく刀のようなものを持った二刀流になっていた。対する清明は背中に赤い機械の羽右手が白い虎のような爪になっており、左手が青い竜のような牙のような爪のような形状になっておりそして周りに亀の甲羅のような結界が浮かんでいた。

カグツチ「清明が、白虎、朱雀、青龍、玄武使つてるみたいだなこりや長くなりそうだし俺たちは逃げようぜ」

道満「そうですね。拙僧も同意見です、では逃げましょうか」

そう言つて二人は逃走を図つた。後に清明にボコされるのだった  
そうして再び二人はぶつかり合った。

シキは清明の亀の甲羅のような結界もとい玄帝武鬪に当たらないように弾幕を飛ばしながら、右手の剣のようなもので斬りかかった。それを清明の右手の虎の爪もとい白蓮虎砲です受け止めたそのまま何度か打ち合うとシキは、いきなり後ろに下がると、シキから見て左の方から清明の左腕の青龍、青閃龍牙が伸び飛んできていた。シキはそれを見ず回避し刀のようなものを糸の様に細く長くしそのまま清明の方に飛ばした。清明は玄帝武鬪で受けようとすると、当たるギリギリで止まりそのままシキの方が引張られてくるような形で縮小させて止まった瞬間に足を踏み玄帝武鬪を飛び越えそのまま清明に斬りかかった。それを清明は朱雀の翼、朱染雀羽を使い後ろに飛ぶことで回避した。

晴明「そもそも何で襲いかかってきたのかな？私まだルール違反起こしてないし」

シキ「お前みたいなジョーカーが、聖杯戦争に参加したことによりラツとして襲いかかった反省も後悔もしていない」

晴明「やれやれ」

そう言うと、晴明の姿が消え、シキの腹を白蓮虎砲で貫いていた。

晴明「じゃあバイバイ」

そう言っただけでカグツチたちを追いかけていった。

## 純白の章 第6冠

さて、いきなりですが聖杯戦争のの監督役が死にました。そう死んだはずですよ。

花音「話は、理解したわ、この世界の安倍晴明がまさか蓬莱の薬で不死になっていて、アルターエゴのマスターなのねで、なんであなた生きてるの?」

アビー「そうよなんで生きてるの?」

ルーラー「私も同感です、マスターなんで生きてるんですか?」

シキ「酷ない、俺が生きてちやいけなわけ、まあ生きてちやいけない人種だけだ」

花音「そこ否定し切らないのね」

シキ「まあ、種は簡単だ。俺の能力で作ったこれがある限り俺は死なない」

そう言うと、ポケットから黒いUSメモリーを取り出して見せた。

花音「それって何?」

シキ「これって俺の身体情報と脳の記憶情報が入った。いわば俺のバックアップだぜ」

そう言っで見せてると、

アビー「えい」

そう言っシキのてからUSメモリーを取って走り回ると

ルーラー「これは卑怯すぎます」

そう言っルーラーがUSメモリーを取って砕いた。

花音「ちよつとあなた何してるの!?!てかシキあなたもなんでそんな普通にしてんのよ」

シキ「逆に聞くけど俺のバックアップがあれ一つとでも」

花音「はあ、あなたならそう言うと思っただわよ本当出鱈目な、でどこにあるのよ」

シキ「世界中にばら撒いたけど」

花音「本当に出鱈目ね、そういえばあなたの能力って結界を調律する程度の能力ともう一つあるのよね、それって一体なんなの?」

シキ「ん？俺のメイン能力か？」

花音「そっちがメインなのね」

シキ「俺の能力は、全てを編集する程度の能力だぜ」

花音「は？」

シキ「俺ちよつと幻想郷行つて遊んでくるからじゃあな」

そのまま無視して空間を破りシキはどこかに行つてしまった。

ルーラー「遊びに行くつて、戻ってきたら殴りましょう。それに一樣あれの設置もしないといけませんね、あのキャスターはいけませんし」

そう言ううと金色の双剣を取り出しながら端を繋げて弓にして外に出で行つた。

時を加速させて場面は変わつて

嘉秀「さて、仕事終わったし帰るか」

そう言つて定時に帰っていると

ハサン『マスター殿つけられています』、

嘉秀『あいつならほつておいていいぞ、ただの俺好みのストーカーだから』

ハサン『あのようの方がマスター殿タイプですか、ですが私の感ですが彼女も聖杯戦争のマスターだと思えますぞ』

嘉秀『そうなのか、わかつたサーヴァントの調査をしてくれ、そのあとサーヴァントが倒されていた場合、俺の名前を出して保護してくれ』

ハサン『御意』

そうしてつけられながら家に帰るのだった。

帰つてると。

??「嘉秀さん、お久しぶりです」

と挨拶してくる、群青色の髪色して白いマフラーをした青年がいた  
嘉秀「久しぶりだね。八雲くん、こんなところで何をしてるんだい」

八雲「今、俺はちよつと幼馴染がやってるオカルト探偵事務所の探偵になっていて、ここらあたりで何か起こつてると聞いて調べにきたんですよ」

嘉秀「そうか、それについて心当たりがある、家に行かないか？」

八雲「わかりました」

そう言つて二人は家に向かった。

家に着くと、

八雲「心当たりつてなんですか？嘉秀さん」

嘉秀「じつは……」説明以下略称

八雲「シキのバカ何してるんだ」

嘉秀「主催者のことを知ってるのか？」

八雲「ああ、幼馴染の元同級生の弟だよ」

嘉秀「!?まさかそんなに若い子がこんなことをしてるのかい」

八雲「あいつの能力なら可能だと思いますよ。あいつのことです絶

対ろくなことにならないんで、俺も協力しますよ」

嘉秀「君の協力を得られるのはいいんだが、君はいいのか？」

八雲「問題ありません」

嘉秀「じゃあよろしく頼むよ」

そう言つて二人は握手をした。

## 純白の章 第NANA監

夜

ラグナロク「夜になった聖杯戦争の時間だ。本当に行くんだなマスター」

好美「ええ、当然よ聖杯戦争に勝つためにはこっちから出ないといけないもの」

ラグナロク「了解した。あつちにもう一人のキヤスターとキヤスターのマスターがいる速攻で仕掛ける、一気に飛ぶ捕まれ」

好美「ええわかったわ」

そう言っつてラグナロクに捕まると一瞬で飛んでいった。

そして、ターゲットにされたムラサは、

ムラサ「なんで他のマスター見つからないのかしら？」

キヤストリア「みんな隠れて様子見でもしてるのかな？」

そう話していると、突然人が目の前に出てアルトリアの腹に拳が入っついで吹き飛ばした

ムラサ「キヤスター!？」

援護をしようとしたら

ラグナロク「悪いけど、援護はさせられないな」

いつのまにか弾幕の檻が張られていて身動きが取れないようになっていた。

キヤストリア「マスター!？」

アルトリアは地面を通して魔術を放ったが、目の前にいた好美が地面を殴り衝撃だけで相殺した。

キヤストリア「ウソ、なんで」

ラグナロク「当然だろ俺が強化してるんだからな」

そう喋りながらラグナロクはさらに好美を強化して、好美は前に出てストレートを放った。それをアルトリアは杖でいなしているが後ろからラグナロクで蹴られ吹き飛ばされた。

好美「これで終わりね」

そう言っつて後ろからラグナロクに渡されていた戦鎧を取り出すし

振りかぶろうとした時、後ろからドゴンと音が聞こえて振り返ると、ラグナロクの弾幕の檻を自身の結界で無理矢理弾いて破壊し外に出ることができたムラサがいた。

ムラサ「大丈夫キヤスター」

そう言っただけで近づきアルトリアのことを治癒し出した。

ラグナロク「マスター下がっている、俺の宝具でマスター事消しとばす」

好美「わかったわ」

ラグナロク「我が敵を滅する絶対なる一撃全てはこの終末のために紡がれた物語に過ぎぬさあ絶望と恐怖を持って塵芥となるがいい『絶望せよ混濁せよ』この一撃は全てを滅ぼすためにある」

そう言っただけで、手に持った礼装を使い黒く禍々しいレイザーを放った。

キヤストリア「マスター下がってください」

治癒を終えたアルトリアがマスターを後ろに下げて、

キヤストリア「あれはいつか見た終わりの星、多くの言葉、僅かな煌めき。どれほど遠く汚れても、私は星を探すのです。さあ、幕を上げて『きみのいだく希望の星』」

ラグナロク「なっ?!対粛清防御だ」と

そう言っただけで宝具を途中で切っただけで好美を抱き寄せそのまま後ろに大きく飛んだ。その瞬間ドガンと爆発したがそこには、倒れているが無傷の二人が出てきた。

好美「へえ消し飛ばすんじゃなかったの?」

ラグナロク「対粛清防御は流石の俺でも貫けないっての、まあいい今は、無防備だトドメを刺すぞ」

そう言っただけで近づこうとした時、

??「霊符「夢想封印」」

そう言っただけで陰陽玉が降ってきて妨害された

好美「あなた誰?」

そう言っただけで煙から出ると、ラグナロクと瓜二で髪の色を反転させた青年もとい紫電翼が立っていた。

翼「よう、久しぶり、型月時空での俺」

そう翼が言って馴れ馴れしく話しかけてきた

ラグナロク「なんでお前がここにいる」

翼「ここが俺が住んでる世界だからな、あつ霊夢と連絡するか？繋げてやるぜ」

ニヤニヤしながら翼が携帯を取り出して近づいてきた。

ラグナロク「マスター一旦逃げるぞ、あいつには俺は勝てない」

そう言うど好美に有無を言わせず抱えて飛んでいった。

翼「ありやりや嫌われたもんだな」

そう言うて倒れてる二人をスキマに入れて翼も消えていった。



## 純白の章 第蜂巻

幻想郷とある城

ムラサ「うーん、あれどこどこ？」

??「起きましたか」

ムラサ「誰!？」

??「これは失礼しました。私、常闇 斬夜と申します。よろしくお願いたします、主人から起きたら連れてくるよう言われているのできてもらえますか」

ムラサ「わかったわ、その前に一つ聞きたいんだけど、金髪の子がいるはずだけどどこにいるの？」

斬夜「彼女ならすでに起きられていますよ」

ムラサ「わかったわ」

そう言って起き上がり、斬夜について行くことになった。  
そうしてつくと

??「よく来たわねお客人、私がこの城の主人紫電 つびやき…」

ムラサ「えっと」

??「よく来たわねお客人」

ムラサ「そこからやり直すの」

??「やっぱりに私に紫電家当主なんてできないよお兄ちゃん」

そう言いながら玉座ぼいところから降りて隅っこに行つてブツブツ言い出した。

斬夜「あの方が私の主人紫電椿様です」

ムラサ「あつはいそうですか、あのー私を助けてくれた人つてもうちよつと髪が長かった気がするんですけど」

斬夜「その人は翼様ですこの城極光城の元主人です、あなたを助けたのも翼様ですよ」

ムラサ「そうなんですか、その翼つて人つて今どこにいるんですか？」

椿「お兄ちゃんなら今の時間博麗神社にいるわよ」  
と言つて復活してきた椿が来た。

斬夜「あの方は感がいい、待ってれば来ますよ」

ムラサ「そうなんですか、あとあの子は」

椿「アルトリアちゃんならあっち」

そう言つて外を指すと

??「そんなんじや当たつちやうよ。あははは」

キャストリア「ちよつと待つてお願い待つてキャア」

外で綺麗な弾幕を放ちながら笑つてる椿の黒赤バージョンとその弾幕を半泣きになりながら避けてるアルトリアがいた

ムラサ「あれ何？」

椿「あれ？弾幕ごつこで遊んでるだけよ」

ムラサ「あれ遊びなの？」

翼「そう、遊び正式にはここでの争い事の解決方法でもあるんだがな」

その声が聞こえて振り返ると、空間が避けていてそこから上半身だけ出してる翼がいた

ムラサ「えつと助けてくれてありがとうございます？」

翼「なんで疑問系まあいいや、礼はいいぞ俺の目的はあの人類悪だし」

ムラサ「人類悪？」

翼「人類悪つてのはこことは違う別の世界で起こる7つの災害の一つ、人類によつて人類を滅ぼす悪、要するに人類の自業自得で生じた罰だなあ。サーヴァントは、人類悪が存在する世界で生まれた俺が第8の獣を名乗り色々しでかしたんだよ」

ムラサ「そんな人も召喚できるんですか？てか7つの災害なのに第8の獣？」

翼「あいつが勝手にそう名乗つてるだけで、正式にはピーストI裏なんだぜ。抑止力に修正されてこうなつたらしいここから先はシキがFGOの話を書くのを期待してくれ」

ムラサ「なんですかそれ」

斬夜「別に気にしないでください、ただのメタ発言です。私は椿様を連れて外に行つてますね。あとあのサボリ魔門番を斬つてきます」

翼「行つてら、てことでこつちで少し話したいことがある来てくれ」  
そう言つて空間を歪ませ机のある部屋に転移した。その場所には  
すでに紅茶が置かれていた。

翼「さて、色々話したいことあるけどとりあえず、ムラサは今日か  
ら俺の弟子な」

ムラサ「は？」

翼「今日から俺の弟子な」

ムラサ「いや二回言つて欲しかったわけじゃないけど」

翼「大事なことだし二回言つた」

ムラサ「なんでそうなったの」

翼「さつき説明しただろ、あいつとやりあうには実力不足だから俺  
が鍛えてやるんだよ。俺が直接相手してやってもいいんだけど、リベ  
ンジマツチしたいだろ」

ムラサ「お願いします」

ところ変わつて今日の晴明さん

道満「拙僧は一体なにを見せられているのでしょうか？」

道満が見ているものといえば、

??「やはり魔法少女ボンボンビーナいいですね聖タン」

晴明「そうだね新」

現在晴明は、聖杯戦争そつちのけでわざわざ土御門島にきていてそ  
して十二天将太裳の☒ 新と一緒に魔法少女ボンボンビーナを見て  
いるのだった。

カグツチ「いつものことだから気にしない方がいいぞ」

道満「そうですか」

晴明「カグツチ達もしっかり応援してる?」

道満&カグツチ「しっかり応援してます」

新「うんうんそれはいいことだ。そういえば聖タンが持ってきたあ  
の式神とてもすごいね」

晴明「いや〜それほどでもあるよ〜そういえば今日映画のDVD  
持ってきてるけど見る?」

新「見よう」

映画鑑賞まで始まってしまった。

## 純白の章 第九卷

朝シキが住んでる団地

シキ「たっだいまー」プス ピチュン

シキが扉を勢いよく開けると、そこにはすでに投げられていた包丁が来ていて、脳天に刺さってピチュツた

花音「お見事です」

そう言つて拍手をする花音もいた。

ところ変わつて昨夜戦闘あと

士郎「ラグナロク、あいつやりすぎだろ」

そう呟きながらラグナロクの宝具の痕を消していつてる士郎がいた。

希空「この後を残した相手のことを知ってるのかしら？」

士郎「誰だ」

希空「初めまして、あなたも聖杯戦争のマスターね」

士郎「ああ、そうだな、でなんのようだ」

希空「これをやった犯人について聞きたいけど」

士郎「悪いがいえないな、信用できない相手にこっちの持つカードをタダで渡すだけでも」

希空「私は、この聖杯戦争を平和的に終わらしたいんだけど」

士郎「じゃあそこにいるサーヴァントの武装を解いてくれ、話はそれからだ」

希空「悪いけどそれは無理ね。あなたが私達を信じられないように、私もあなたのこと信じられないもの」

士郎「それじゃあ仕方ないな」

そう言つて士郎の手から黄金の聖剣が作り出された。

希空「!?あなたなんで約束された勝利の剣を持つてるの」

士郎「それをいうと思つたか」

そう言つて士郎が希空に向かって斬りかかりナポレオンが間に入り受け止め弾き飛ばし、近距離で大砲を放った。

ナポレオン「悪いが希空には指一本も触れさせないぜ」

士郎「まあそうなるわな」

そう言うのと士郎の左手に黒い聖剣も握られていた。

希空「あなた、一体どういう出鱈目をしたらそんなことできるのかしら」

そう言うって簡単な魔術で強化しつつ自分もいつでも物量で押しつぶせるように準備した。

希空「フレイラ×10000強化ヒュドラフレイラ」

そう呟くと、九つの首を持つ炎の蛇を作り出しそのまま士郎に向かわした。士郎は、2本の聖剣を使い首を全て切り落とすが、炎が肉体に還元されさらに首が2倍に増えていった。士郎が苦戦している間に

ナポレオン「虹よ、虹よ！今可能性の橋を架けろ！空を征け！

アルク・ドウ・トリオンフ・ドウ・レトワール  
『凱旋を高らかに告げる虹弓』

士郎に目掛けてナポレオンが魔力を溜め宝具を放った。士郎は熾天覆う七つの円環で防ごうとしたが、後ろから

希空「マスタースパーク・Ω」

希空の魔法の4大元素を混ぜ合わせた超魔法を放っていた。煙が晴れると士郎をボロボロの翼で覆うよう防いでいた赤い鳥がいた。

赤い鳥「王よ、ご無事ですか」

士郎「王って言い方やめろって言うてるだろ、まあお前のおかげで助かったからいいけど」

希空「それあなたの使い間かしら？」

士郎「それをいうとでも」

希空「まあそうよね」

士郎「このまま戦えばここらあたりが吹き飛ぶ、悪いが帰らせてもらうぞ」

そういうって飛ぶと、赤い鳥が巨大化してそのまま飛んで行った

ナポレオン「逃げられちまったな希空」

希空「そう見たいねでも次会う時はもうちよつと警戒解いてもいいわね」

ナポレオン「そうだな、あいつ俺たちのことを傷つかないように手

加減していたしな」

希空「当然でしょうね。こつちを殺す気なら初めっからあの聖剣を解放すればいい話だしね」

ナポレオン「調査続けるのか？」

希空「いいえ、あつちに美味しそうなスイーツの店があつたからそつちに行くわ」

ナポレオン「了解希空」

そう言つてそのままこの場を後にした。

??「これ絶対にシキの仕業だよな、ハア我が兄ながらなにでかしてるんだか」

一人の男がその現場の一部始終を見ていた。

## 純白の章 第10巻

嘉秀「今日が休みだからって、外を歩き回るんじゃないやなかったようだな」

そう嘉秀は呟いた。なぜなら

スサノオ「サーヴアントつても大したことないな、まあ心臓潰されたのはちよつと驚いたけどな」

目の前に嘉秀が知ってることじゃないが、穢側の婆娑羅最強がいるのだ。そしてアサシンは宝具を使い心臓を潰したが、スサノオは死なずそのまま倒されて瀕死の状態になってしまった。

スサノオ「さてお前は来ないのか？なかなかいい不意打ちだだけ、お前があれを指示してたんだけ」

嘉秀「悪いが俺は指示を出すことしか脳がないんでなできれば退散してほしいだが」

スサノオ「まあ確かに弱いもん潰してもつまらんし他のやつ当たるか」

そう言つて退散しようとした時、

??「その人間いらなら俺に出来ないかい？」

そこには継ぎ接ぎだらけの青年が立っていた。

スサノオ「お前呪霊か、それもすでに特級クラスか話しかけるんだつたら俺がいなくなつてからするんだつたな」

そう言つてスサノオは白い剣を構えた

呪霊「あれれ、俺と戦うのか同じ呪霊なのに？」

スサノオ「やれやれ、穢と呪霊の違いがわからないのか、まあいいとりあえず死ね」

そう言つて一気に接近して呪霊の両腕を切り裂きそのまま首を落とそうとしたがギリギリで首の9割しか切り落とせなかった

呪術「ウソ、ヤツバ君強いね」

そう言いながらも既に腕も首も再生していた。

スサノオ「それがお前の術式か？」

呪霊「そう、無為転変つて言うんだよ。」



スサノオ「へえ、そつちも力教えてくれたしこつちも教えてやるよ。  
『神創頭符須佐之男急急如律令』」

そう言って一枚の青と黒が混ざり合った不気味な頭符を投げ剣で切るとその剣が蒼、スサノオの背丈ほどある大剣に変わった。

スサノオ「さあ戦いを楽しもうぜ」

そう言うとき先ほどよりも早く呪霊の目の前に着くと大剣を白い剣の状態と変わらない速度で振られ呪霊をバラバラにした。

呪霊「ダメダメ、俺を殺したいんだったら魂に干渉しないとね。  
まあ無理だと思うけどね」

??「なら、これならいいということだな」

呪霊「えっ?」

そう言うときその呪霊が魂ごと真つ二つに切り裂かれた。

呪霊「ウソ、逃げないと」

そう言って自分の姿をへびに変えて道路の溝に入り込み逃げて行った

スサノオ「オイ爺さんよく邪魔してくれたな」

??「ワシは、爺さんじゃない、竜玄じゃさつき其奴から連絡が来たから来たんじゃない?」

嘉秀「竜玄さんお久しぶりです、自分が小学生ぐらいの時以来ですね。まさか生きてるとは思いませんでしたけど助けてくれて感謝します」

竜玄「そうか、それは良かった。その穢、戦いたいんだったらワシが相手になってやる、場所を変えるぞ」

スサノオ「おもしれえいいぜノツテやる」

そう言って二人とも消えて行った。

嘉秀「この前とは立場が逆転したな」

そう言いながらも左腕を潰されたアサシンを背負いそのまま家に帰って行った。

とあるビルの屋上

零「なんか変な気配があると思ったらあんなもいたんだね。スグルン」

スグルン? 「零、前から言ってるけどそのスグルンってやめてくれないかい、私には夏油傑って名前があるんだ」

零「スグルンはスグルンでしょう、それよりあの婆娑羅について観察してたけど私たちとは次元が違うことぐらいしかわからなかったわね」

夏油「呪術師でも、その穢つてのは、祓えるんだろ」

零「ええそうよ、その逆である呪霊を陰陽師が祓うこともできるわ」

夏油「つまり陰陽師は、猿じゃないってことだね」

零「私に聞かれても困るわ、今まで見てきた陰陽師私自身だけだもの」

夏油「私が言えるのは、君は絶対陰陽師じゃないってことだけだね」  
零「そういえば最近、君の死の偽装をした際の殻あれ誰かに利用されてるみたいだけど放置でいいの?」

夏油「まだいいさ、いざって時は今の私たちのしでかしたことを全て彼らの責任にして逃げるって方法もあるし」

零「相変わらずのクズねそう言うところ友人として好きだけど」

夏油「そりやどうも君にはもう王子様いるみたいだし気にする必要はないよ」

零「なっ別に悠仁が王子様なって」

夏油「べつに私は虎杖悠仁君が王子くとは言ってないよ」

零「… 死ね」

そう言って顔面に蹴りが入りそのまま吹き飛ばし逃げて行った。

夏油「いたたた、あの子もまだ子供だね、彼女もうちよつと子供らしいことすればいいのに、無名護ちゃん」

そう言って夏油も零の跡を追った

## 純白の章 第十一環

極光城

翼「さて、ラグナロクについて説明しよう」

ムラサ「その前に突っ込ませて、その格好でやるの？」

現状の翼の格好は腰まである髪を一纏めにしてエプロンを着てる状態である。男って知っていなかったら結構美人と言われるらしい（料理技術は外の世界の五つ星の店を遥かに超えるレベル）

翼「着替えるの面倒だしこのままの格好な、てことでまずあいつのビースト名終末の神　ラグナロクって名乗ってる司る理は信仰のされる側、真名は紫電翼ラグナロク、ランク変動はわからないけどビースト時にもっていたスキルは一つ目は、『ネガ・ラグナロクEX』自分を受け入れるもの又は自分が受け入れたもの以外の攻撃を全てキャンセルする。二つ目は、『獣の権能EX』自身の信者に自分の力の一部を与えることができる。ランクも自由自在に変えたりもする。三つ目は『単独顕現A』単独行動ってスキルのウルトラ上位互換だ。まあ今回はキャストとして参加してるみたいだし、これはもってないだろう。この三つが基本のビーストとしての権能まああいつのマスターが三つの令呪を捧げて初めて使えるものだから気にしなくていいぞ（フラグ）、こっからはあいつが英霊として持つてるスキルだ。一つ目が『神眼EX』簡単に言うとも魔眼や千里眼みたいな目に関することならなんでもできるぞ。二つ目が『紫電の叡智EX』これは、外付けの根源接続礼装だな全知全能になれる。三つ目が『忌子の姿A＋』これは、俺が禁術で作られた証拠みたいなものだ。四つ目が『幻想の意思EX』型月世界での幻想郷での主神格の神である証拠だな。あとは、『高速詠唱B＋』と『直感B』があるこれは、読んだままのものだから省くぞここまでで質問はあるか？」

ムラサ「チート過ぎない？」

翼「チートです。俺の方が強いけど」

ムラサ「今意味わからないこと聞こえたけどスルーするわ、質問だけどなんでそんなに強いのにその人なんで人類悪になったの？」

翼「あいつのくだらん承認欲求を満たすため？」

ムラサ「なんで疑問系なのよ。しかもそんな適当なわけないでしょ」

翼「はあ、あいつは俺がやろうとして失敗したそしてする必要のなかった復讐をやり遂げ終わった際未来視をたまたましてみたらしい、世界が滅ぶ瞬間をそれを覆すため自分を認めるものを人類としてそれ以外を先に滅ぼし尽くし相手の前提条件を覆そうとしたんだ」

ムラサ「それって形はアレだけど、結局人類を救おうとしたってことでしょ、それでなんで人類悪なんて呼ばれてるのよ」

翼「ラグナロク限定の話じゃなくてな、人類悪は基本人類愛の裏返し人を愛するが故に今ある人類に牙を剥く、そう言う奴らが人類悪、確かあの型月の世界だと今裏の第四、第五の獣を相手してるはずだぞ」

ムラサ「聞いた限りそのラグナロク？勝つ方法ないように聞こえるんだけど」

翼「相手はサーヴァントまで格下げされてるんだ。そこまで出鱈目じゃないぞ。あの宝具は対界宝具だけど」

ムラサ「最後物騒なこと言ったわね」

翼「とりあえずあいつの攻撃になれるため俺と弾幕ごっこするぞ」

ムラサ「えっ」

そう言う翼はムラサを無視してどこかへ連れて行った。

とある路地裏

希空「さつきからあなた私をつけてるみたいだけどなんのようかしら？」

??「あなたにとっていい情報を教えに来てあげたのよ」

希空「それを信じるわけないでしょ」

??「信じる信じないの問題じゃない私があなたに情報を与える。それさえできればいいのよ。あとは、好きにすればいい」

希空「で、その情報って何」

??「今回やつてる戦争の主催者この前遊び半分を外なる世界の神を召喚していたわ」

希空「なんですって!？」

??「私は伝えたは、それじゃあ」

そう言つて黒髪の鎌を背負つた少女は飛んでいった

希空「あの主催者、本格的に倒さないとまずいわね」

そう言つてそのまま路地裏から出て行つた。

## 純白の章 第銃荷間

晴明のたまり場

晴明「さて、読者の皆さん今日はみなさんが待ちに待ったとある事が起きますよ」

道満「一体誰に向かって話してるんですかな？晴明」

晴明「？画面の向こうのお友達だけど」

道満「拙僧にはわかりませんな、それより今日は一体何が起こるんですかな」

晴明「そりや当然、道満が派手に爆発四散しながら敗退するんだよ」

道満「はっ？」

晴明「てことで令呪二つを用意て命ずる、聖杯戦争を混沌に墮とせ続いて最後の令呪を持つて命ずる、二日以内に一人もサーヴァントを脱落させなければその場にマスターとサーヴァントがいる時爆発四散しこの土地を聖杯戦争終了まで呪い続けよ、てことで行ってらっしゃい♪」

そう言つて道満を投げつけた

道満「話が違いますぞー晴明」

道満は投げられてしまった

ところ変わつて神社

ソル「はあ、まさか聖杯戦争参加者以外の存在に襲われて災難ね」

嘉秀「災難ですまさないでくれ、アサシンの腕つて治るのか？」

ソル「完璧に治癒しておいたから大丈夫よ安心して」

そうして話していると、ハサンが静かに起き上がり、嘉秀を見ると

ハサン「まさか心臓を潰しても生きているものがあるなんて狙った相手を必ず殺すアサシンとして不甲斐ない姿を見せてしまい、申し訳ございません」

嘉秀「今回は仕方ないさあ、なにふり構わず俺が竜玄さんに連絡を入れていれば助かったのを躊躇った俺の判断ミスだ」

ハサン「それこそマスター殿責任ではありません、元々聖杯戦争に関係ないものを巻き込むことは神秘漏洩にも繋がり禁忌とされてい

ます」

嘉秀「それでも」

ソル「はいはい、二人とも落ち着いてとりあえず今回は二人とも悪いでまとめましょう。それより、フォーリナーのマスターも呼んだしそろそろくると思うわ。情報をまとめといてちょうだい」

そう言ってソルは部屋から出て行った。

嘉秀「とりあえず、あのスサノオって名乗ってたやつの実力をまとめようか」

ハサン「御意」

好美の家

ラグナロク「休めたかマスター」

好美「ええ、だいぶ休めたわ。昨日の夜のあのあなたのそっくりさんは誰かしら？」

ラグナロク「まあ、そうなるよな」

そう言いながら翼が席に着こうとした時、上空から変な魔力を感知し神眼を使うと、地球の衛星軌道上に黄金に輝く7つの矢があつた

翼「バカな!?!なぜ終末剣エンキの矢が放たれている、英雄王の気配はしなかったぞ!」

好美「どうしたのキャスター?」

翼「どこのどいつがしでかしたか知らんが簡単に地上を滅ぼせるもん出してる奴がいるんだよ」

好美「あなたならどうかできないのかしら?」

翼「流石に無理だ。ビースト状態ならいけるが」

好美「ならそれになればいいじゃないの」

翼「なら、お前の令呪三つ切つてもらうぞ、それにあくまで放たれるまでなにもできないのは変わらないしな」

好美「ならばしばらくは放置ねそれよりもあなたの話よ」

翼「わかったは、あいつはこの世界の俺だ。俺はこことは違う世界から来たからな」

好美「なんであなたが勝てないの?同じ存在なら戦い方によっちゃ勝てるでしょ」

翼「あいつと俺の歩んだ道が違いすぎるのと、俺とあいつは同じに存在でありながら根本が違うんだよ」

好美「つまり、あれがあなたにとって天敵なのね」

翼「そう言うことだ」

好美「ふーんわかったわそういえば嘉秀さん今なにしてるの？」

翼「アサシンのマスターならアサンシンが瀕死の状態になって（とある神社で）治療してるぞ。コレで落ちてくれれば仕事が楽になるんだがな」

好美「そうねえ、嘉秀さんは、私あんまり傷つけないし難しいわね」

そう話しながら、日は沈んでいった。



## 純白の章 第Ⅱ卷

神社

花音「アサシンがやられたって聞いたけどピンピンしてるじゃないの」

そう言いながら花音が神社に入ってきてた。

ソル「僕が治癒したからね」

花音「あなた、一体何者よほんと」

ソル「それは、秘密だよ。乙女はミステリアスなものって小説が言ってたし」

嘉秀「それ微妙に違う気がするんだが」

ソル「それは置いといて本題に入ろうか」

嘉秀「わかった、俺があつたのはスサノオって言う本人曰く穢って言った。特徴としては蒼髪的青年で服を肩に羽織ってるだけで、腹に確か道満だったかが刻まれていた。身体能力は英霊と互角にやりあえて心臓を潰されても活動可能、特急呪霊って言ってたやつに何かしらの札を出し切ったらあいつの背丈ほどある大剣に変わった。俺がわかるのは、これくらいだ」

花音「なるほどわかったそいつについては、監督役に聞いてみるわ」

聖子「それなら私が教えてあげるわ」

ソル「知ってるのかい？聖子」

聖子「当然よ。」

そう言つて穢と禍野と陰陽師について説明した。詳しくはシキが双星の陰陽師を書くときに聞いてね。

花音「なるほど、なら呪霊ってわかる？」

聖子「出雲出てきなさい」

そう言つと、聖子の後ろから白っぽい狐耳と尻尾が生えた少女が現れた

出雲「お呼びでしょうか？聖子様」

聖子「あなたなら呪霊が何が知ってるでしょ説明しなさい」

出雲「はいわかりました。呪霊とは穢と似て非なるものです。元々

陰陽師が祓っていたのですが、清明様が陰陽連のトップを辞めて以来、ソリを分ち呪術師と陰陽師と別れ、それぞれ祓う分野を分けています。そして特急呪霊とは、大体穢の婆娑羅と同格のものを指します」

聖子「ご苦労様」

花音「ちよつと言つときたいことあるんだけどいいかしら？」

ソル「どうぞ」

花音「監督役の情報なんだけど、今回の聖杯戦争のアルターエゴ？のマスターに安倍清明が参加してるらしいわよ」

聖子「あのエセ幼女何してるのよ（怒）」

出雲「聖子様、落ち着いてください」

聖子「わかっているわよ、とりあえずここ好きに使っていいわ。私は少し清明と話をしてくるわ」

そう言つて聖子は出雲を連れて出て行った。

花音「言うタイミング間違えたみたいね」

ソル「それ自分で言うの」

場面は変わり

幻想郷

??「翼ー少しスキマ貸せー」

そう言つて飛んできた青色の人狼<sup>チワワ</sup>

翼「岳斗じゃん、どうしたそんな不機嫌そうに」

岳斗「あのクソババアにいきなり滅びかかっている並行世界の幻想郷に落とされたからしばきに行く」

翼「辞めとけ辞めとけ、あのババ」ブベラ

翼が何か言い終わる前にスキマが開き電車のおもちやが飛んできて翼の顔面を直撃した。

岳斗「お前バカだろ」

翼「お前が言うな」

ムラサ「その、人誰」

ものすごくボロボロになっているムラサが出てきた。

翼「こいつか？妖怪の賢者御影岳斗、ただのチワワだ」

岳斗「死なすぞわれー」

翼「いやお前チワワだろ」

と子供見たいなあ言い争いをして。

翼「よしわかったなら、覚醒と能力使用と武器縛りのお前がムラサに勝てたらスキマ開けてやるよ」

岳斗「よし乗った」

ムラサ「えっ!？」

そう言っつて岳斗VSムラサが始まった。

場所は変わってとある喫茶店付近

聖子は希空を睨んでいた

希空「そんなに睨まないでほしただけど」

聖子「突然フルネームで呼ばれたら誰だつて睨むもんよ。この街の人間じゃないなら尚更ね」

希空「一つ聞きたいことがあるだけよ。それに答えたら私は帰るわ」

聖子「わかったわ、今ある人をしばきに行かないといけないから短めに頼むわ」

希空「まずあなたシキつて人知ってるわね」

聖子「知ってるも何も私の友人の弟よ」

希空「なら彼が邪神を召喚した理由、知ってるかしら？」

聖子「ああ、あれねえ、シキの面白半分でやったらしいわ。他に理由はないとも思うわよ」

希空「世界のためとかじゃなくて」

聖子「そんなんじゃないわ、あいつ面白半分や暇潰しに世界融合したりもしてるし」

希空「わかったわ。ありがとう」

聖子「あいつに喧嘩売るんだつたら忠告するわ、あいつが全力を出す前に決着をつけなさい、さもないと死ぬわよあなた」

そう言っつて聖子は立ち去って行った。

希空「あの子とても強い子ね。きつと立派な巫女になるわね」

そう言っつて希空はシキの悪評を信じ打って出ることにした。

## 純白の章 第重志巻

博麗神社

ムラサ「本当にやるんですか？翼さん」

翼「イグザクトリーガンバ」

キヤストリア「頑張ってくださいマスター」

岳斗「準備はいいな、ルール確認だお前は俺に弾幕を一発入れれば勝ち、俺は能力に覚醒、武器の革命拳レジスタンスの使用禁止でムラサを気絶させればいい勝ちでいいんだな」

翼「OK、お前が勝ったら紫のところに落としてやるよ、ただしお前が負ければ一週間俺の犬な」

岳斗「はあ!?そんなの聞いてないぞ」

翼「今言ったもん、てことでスタート」

岳斗「おいー」

岳斗が翼に突っかかりに行こうとした瞬間に

ムラサ「再現「ラグナロクスパーク」」

そう言うのと岳斗目掛けてムラサたちが受けた、黒いレーザーを放った。

岳斗「うお!?あぶね、チツ翼あとで覚えておけよ」

そう言うつて岳斗はそのまま空間を蹴りムラサを殴りかかった。ムラサは岳斗の拳を範囲を狭めた結界で受け止め

ムラサ「再現「春雪異変」」

そう言うのと翼が二人の戦いの舞台にしていた。結界の内側が冬のような雪が降る空間に変わった。

岳斗「異変の再現か厄介そうだが、俺には関係ねえー」

岳斗は妖力を解放して周りの雪などを吹き飛ばし爪を出し手を振るとそのまま斬撃型の弾幕が飛んできた。ムラサは空を飛んで回避したが、先に岳斗が回り込んでいてそのまま拳を結界が間に合わずそのまま受けて地面に激突した。

岳斗「よし俺の勝ち、翼さっさとスキマ出せよ」

翼「何勘違いしている、まだ俺（ムラサ）のエンドフェイズは終わっ

てないぞ」

岳斗「いやないだろそれ」

「そう言つて振り返ると、そこにはふらつきながらも立っているムラサがいた。」

岳斗「チツなるほどならこれで」

と話切る前に

ムラサ「神仏灰燼「第六天魔の三段打ち」」

「そう言つとムラサの周りから炎で形成された火縄銃が生み出されそのまま弾幕が放たれた。そして岳斗はその弾幕に飲まれてしまつた」

場所は変わつて

公園

シキ「余計なことやつてくれたな影鬼」

影鬼「別にあなたの弟のジャビ君から密告があつたからそれを利用しただけよ。あとその名で呼ばないでくれるかしら私は影姫よ」

シキ「相変わらず俺を潰すことしか考えてないんだな」

影鬼「元々あなたが悪いんでしょ」

シキ「いや明らかにお前が悪いだろ」

影鬼「あとあの希空つて子、聖子だったかしらにあなたの悪評聞いていたみたいだけど、そろそろ仕掛けてくると思うわ」

シキ「マジで」

影鬼「マジで」

シキ「にくげるんだよ」

希空「アイサラ・グラシア」

シキ「チツ」

希空が不意打ちです氷の魔法を放つたがシキは氷を手に触れた瞬間氷を分解して魔力に戻した。後ろにいた影鬼がどこからか禍々しい鎌を取り出して四季に振りかぶっていた。

シキ「お前も来るのかよ」

シキは攻撃をかわしながら悪態をついた。

希空「あなたは世界にとって危険な存在みたいだから排除させても

らうわ」

シキ「いやちよタイム俺これでも世界の管理者の一人だけど」

影鬼「そんな人が邪神三柱同時降臨なんかしないでしょ」

シキ「お前がツッコむのかよ」

そう言いながらもシキは二人の攻撃をなんとか避けてる。

影鬼「あいつは殺してもすぐ復活するやるなら封印みたいな拘束系の技を使いなさい」

希空「わかったは、アイサラ×10000強化フェンリル・アイサラ」

そう唱えると氷でできたフェンリルが現れそのままシキに向かって行った。シキはそれを飛んで回避した瞬間後ろにいた影鬼がフェンリルを鎌で砕き破片を飛ばしてきた。飛んできた破片を手から炎を出し溶かしながら空中に逃げて

シキ「殺符「夜の殺人鬼」」

そう宣言すると、ブーメランのような弾幕放ってきた。二人は回避したから攻撃をしようとしたが弾幕が増え続けさらに後ろからも戻ってきた弾幕で挟み撃ちにされて避けづらくなって行った。

影鬼「暗殺技螺旋」

影鬼は鎌を持ち上げる体を捻りながら振り抜くとカマイタチが発生し弾幕を切り裂いた。

希空「アイサラ×5000ウインバラ×5000複合ダイヤモンドブリザード」

そう唱えるとシキに向かって魔法を放った、シキはスペルを切つてそのまま地上におり紅い名状し難い剣のようなものと刀のようなものを取って一気に駆け出そうとした瞬間に影鬼が砕いた氷がシキを中心に復元された。

シキ「やば、お前の矛盾の鎌か」

希空「なにそれ？」

影鬼「私が持つてるこの鎌で相反する二つの現象を少しずらして起こすことができるのよ」

希空「まあいいわ、当初の予定ならこのままアーチャーの一撃で吹

き飛ばす予定だったけど仕留めると復活するのよね」

影鬼「そうよ、世界中にばら撒かれてるこいつのバックアップメモリーを破壊し尽くさない限り死なないのよ。まあ破壊し尽くしてもこいつの姉が復活させるけどね」

希空「だから封印なのね」

シキ「なに俺の前で俺の殺し方相談してんだよ」

希空「あなたは黙ってて」

そう言っって完全に凍らせた。

## 純白の章 第15巻

希空「これどうする？」

そう言いながらシキの氷像を差しながら言う

影鬼「東京湾にでも沈めたら」

希空「考え方がヤクザのそれなんだけど」

影鬼「それはいいとして、人も来るしさっさと処理しましょうか」

希空「それもそうね」

そう言つて二人が氷像をに触ろうとした時

影鬼「あれ、この氷少し黒くない？」

希空「そんなはずないと思うんだけど？」

そう言つて覗こうとした瞬間氷が一気に砕け散り、シキが中から現れた。

希空「嘘！、完全に氷像にしたのに内部から砕いて動くなんて」

影鬼「あつ忘れてた。あいつ意識失つてないならどんな状態でも能力使えるんだつた」

希空「嘘！」

そう言つた瞬間、シキの姿が一気変わった。血管のような赤黒い線がびっしり身体中に現れ、2本の武器も構えていた。

シキ「さて、さつきまでは聖杯戦争の参加者もいたから手加減してたけど、する必要なかったようだな」

そう言つて公園全体にいつのまにか結界が張られていてナポレオンと連絡すらできなくなつていた。

影鬼「狂気化を使われた逃げることに専念した方がいいあの状態のシキは、やばいから」

そう言つて返事を待たずして、地面を蹴り砂を巻き上げ自分の身を隠した影鬼

希空「その狂気化が何かしらないけど、次は気絶させてから封印する」

そう言つて戦う意思を見せたがこの時希空は、聖子の忠告を完全に忘れていた。そのせで判断を間違えた。希空は動こうとしたが何故



か体が動かなかった。それに気づき自分の体を見ると、身体中にピアノ線が張り巡らされていて無理に動かせば簡単に切り飛ばされる状態にされていた。

希空「いつのまにか!？」

シキ「お前は選択を間違えた」

そう言う声が希空の後ろから聞こえた。

希空「さっきまで前にいたのになんで」

シキ「簡単だお前が俺より弱いだけ、さてお前には聞きたいこともあつたんだよ」

希空「なによ」

シキ「お前は何しにこの世界に来た」

希空「そんなの決まつてるでしょ世界を救うためよ」

シキ「世界を救うねえ、何を持って世界救済にするんだ?」

希空「この世界は異端すぎるのよ、無理矢理並行世界の根幹にされ、聞いた話じゃああなたが他の世界と融合されて世界に負担がかかりすぎてるのよ」

シキ「だから?、並行世界の件はルインが絶対神になった影響だな。世界の融合はな、下手に完全融合すると元々いたこの世界の住民に被害が出る。そうならないようにしてるんだよ、世界の融合すると融合する二つの世界の歴史のぶつかり合いになるその矛盾を中途半端な今の状態が歴史が混ざり合わなくて矛盾が発生しないいい状態なんだよ。それもわからないのに勝手なことするな」

そう言つてシキはピアノ線を引こうとして希空が目をつぶった瞬間

??「あらあシキそんな可愛らしい子になんてことしてるのかしら」

その声が聞こえて目を開けると、黒髪の女の人に抱かれシキから離されていた。

シキ「げっ姉ちゃん、なんで来たんだよ」

シキの姉「あそこに倒れてるサーヴァントが助けってくれって言うから来てみたらこんなことになってるじゃないの、シキお姉ちゃんに怒られたのかしら」

シキ「俺悪くないし、俺殺されそうになったし」

シキの姉「それにしちやあ大人気なさすぎじゃないの、この子ものすごく怯えてるじゃない」

シキ「いや、そいつねんれ、シキの姉「ブラスト」グベラー」

シキの姉「女の子に年齢なんて関係ないのよ」

そう言つて希空を降ろすとシキのところに行つて頭を鷲掴みにして

シキの姉「とりあえずルルイエに行つて反省しなさい」

シキ「タイムタイ」ヒュン

シキは足元から現れた魔法陣に吸い込まれて消えていった。

希空「あのその人は」

シキの姉「あつ気にしないでちよつと浮上してないルルイエに送つただけだから」

希空「あつはい、えつとあなたは」

シキの姉「私、聞かれたのならば答えてあげよう。いつもニコニコあなたのそばに這い寄る魔法少女リサリサです☆」

## 純白の章 第獣録勘

リサ「とりあえず落ち着いた場所に行きましよう」

そう言っ指パツチンすると白い蝶が現れリサと希空と遠くにいたナポレオンを包み込む離れていくと家の前についていた。

リサ「ほら上がってちょうだい」

そう言われ希空達は家に上がると、いつのまにか紅茶の準備をしているリサがいた。

リサ「あなたなんであんなにもシキを怒らせたの？」

希空「それは、彼が世界のバランスを崩したりするから倒そうと思っただけ」

リサ「なるほどね、まず一つ勘違いを正すとね。シキは一見世界を滅茶苦茶にしてるように見えるけどあれでも結界調律師って言う世界の管理者の一人なの、それにあの子の能力全てを編集する程度の能力がある限り世界が滅ぶことはないわ」

希空「なんでそんなことが断言できるの」

リサ「あの子の能力は自信が演算処理できればなんでもできる能力なの、その分リスクはあるけどあの子にとってデメリットに成り得ない、私たちの中では上位に入るレベルの能力なのだから断言できるわ」

希空「でも自分の気まぐれで世界が簡単に滅ぶようなことをするのよ」

リサ「それは仕方ないことよ、今矯正中だけどあの子、産まれてすぐ誘拐されて暗殺者として育てられたの、だから基本快樂主義なところがあるけど、それでも自分がしでかしたことは自分でちゃんと責任取れる子よ」

希空「そうだったの」

リサ「暗い話はこれまでよ、そろそろそのサーヴァントについて教えてくれないかしら？」

希空「それは、あなたの弟が始めた聖杯戦争が原因よ」

リサ「なるほどわかったは、シキを送る場所間違えたわねドリームランド幻境飛

ばせばよかったわね」

希空「あなた時々恐ろしいこと言うわね」

リサ「そうかしら、これでも丸くなつた方よ、昔ならウミネコの黄金の魔女みたいなこととして人間を大量虐殺したつて言う黒歴史があるし私」

希空「弟が弟なら姉は姉つてことね」

リサ「それはそうと今日は休んでいきなさい、シキの狂気化を真正面から受けたんだから疲れてるでしょ」

希空「そうね、今日は甘えさせてもらうわ」

そう言つて希空はリサの家に休むことにした。

幻想郷、博麗神社

そこでは翼と龍馬が腹を抱えて爆笑していた。それは周りが扱れるぐらいには笑い転げていた。なぜなら、岳斗が正座をした状態で犬小屋（岳斗サイズ）に入つて犬用の首輪を嵌めてリードをつけられた状態で首に『今日一日ご主人の犬だわん』と書かれたボードを垂らしているからだ。この様子から分かる通りムラサとの勝負にはギリギリで弾幕を当てて勝利したようだ。

ムラサ「そんなに笑うことないでしょ翼さん」

岳斗「気にするないつものことだ、あと変に気遣うなそれの方がダメージがやばい」

ムラサ「えつとごめんなさい？」

そのまま話は続かなかつた

時は進み夜

花音「帰つてきたわよ」

エボルト「おつと、帰つてきたか悪いがシキから連絡があつたんだがしばらく海底遊園地ルルルで遊イんでから帰るそうエだ。俺と黎斗と茅場が監督役代理するからよろしくな」

花音「なんでそんな物騒なことになつてるのよ」

エボルト「あいつ姉のこと怒らせたらしいわ」

花音「ああ例の転生してる魔女ね」

エボルト「そいつ、あいつまじでやばいからな。じゃあ俺は寝るは

チャーオ」

そう言って自分の寝室に戻った。

花音「はあ、私も寝よ」

花音も寝に行った。

場所は変わって蘆屋道満

道満「やばい、やばいですぞ拙僧が生き残るには最低でもサーバーア  
ントを一騎落とす必要がある。聖杯戦争を混沌に落とすとかはむし  
ろ拙僧がしたいことなのでいいですが、はてはてどうしたものか？い  
やむしろ一騎落とせば拙僧の縛り呪が無くなり自由になれる。なるほ  
どこれを見越してのあの令呪（大当たり）約束を放棄されたと思いま  
したがやはり抜け目がなく約束を守るものですか、ならば期待に応え  
ましょう」

そう言って歩いてみると、

道満「おやあれは確か、晴明が式神を使って集めた情報だと、アサ  
シンのマスター、アサシンはスサノオ殿に腕を潰されしばらく戦闘不  
能にされたはず、ふむふむ狙うなら今ですな」

そう言って電柱に隠れながら（派手すぎて隠れきれない模様）つ  
けることにしようだ。

## 純白の章 代十七卷

人通りが無い交差点

道満「これはこれはどうもアサシンのマスター―拙僧アルターエゴのサーヴァントです。どうぞお見知り良きよ、そしてさよならです」

そう言っただけで黒い波動を出し道満は、嘉秀に襲いかかった。

嘉秀「くそ、俺ただけ不運なんだよ」

道満「そういえばあなたは一度目は野良の呪霊、今朝スサノ才殿に襲われてましたね」

嘉秀「あれは、お前らの差し金か」

「そう言いながら道満の攻撃から必死に避けていた。

道満「おやおや、なぜアサシンを呼ばないのですかな？呼べない事情でもあるのですかな」

今現状はハサンを呼べない、なぜならハサンは呼べない、なぜならハサンは、別のところで交戦中だからだ。何度も逃げ続けていたが、

道満「そろそろ限界みたいですねえ〜ではこれで」

そう言っただけで嘉秀目掛けて札を投げそれをかわしきれず右目に当たり潰されてしまった。

道満「外してしまいましたか、ですがもう避ける気力はないでしょう、これで令呪の縛りは無いに等しい、拙僧のために死んでください」

そう言っただけでトドメを刺そうとした時、嘉秀の周りから金色の蝶が現れ

リサ「その人私の知り合いなのやめてくれるかしら」

そう言っただけで手のひらから黄金の魔力を放出して道満目掛けて飛ばしその隙に嘉秀と自分を自宅まで転移させた。

道満「くっどうやら逃してしまいましたか、まあ問題ないででしょう、次の獲物を探しましょう」

そう言っただけで別の獲物を探しにいった。

時間は少し戻り

ハサン「そこにいる者出てこい」

晴明「出てきてあげたよ」

ハサン「子供が我々に何の用だ」

そう言った瞬間

晴明「天后」

そう言うくと手元にマシンガンが握られていて容赦なくハサン放った。ハサンはそれを回避した。

ハサン「どうやら敵のようすな」

そう言うって左手で黒いナイフを取り投げつけた。晴明はそれをマシンガンで打ち落とし、そのままマシンガンをハサンに向けて投げつけ、

晴明「騰蛇」

そう言った瞬間晴明の周りから毒ガスが噴出し出し周り一帯を一帯を腐食し出した。

ハサン「なっ無差別攻撃ですか、一体なにを考えてるんですか!？」

晴明「私は、子供じゃない。霧槍騰蛇急急如律令」

そう言うくと周りにあった霧が一体の蛇の形になりそのまま突進してきた。ハサンは避けているがどんどん追い詰められていつていた。そして

晴明「これで終わりね」

そう言うってハサンを追い詰めた。そのままトドメを刺そうとする

希空「ボルティガ」

そう唱えると晴明目掛けて雷が放たれた。晴明はそれを後ろに飛んで回避したが

ナポレオン「そうくるってわかってたぜ」

そう言うって宝具の大砲で晴明を殴りつけ吹き飛ばした。

希空「大丈夫かしらアサシンのサーヴァント」

ハサン「なぜ私を助けた」

希空「私の恩人があなたのマスターの知り合いらしいのだから助けたの」

そう言うってハサンをナポレオンに背負わせ。リサの家に連れて帰った。

晴明「逃しちやったか、まあいいや私の目的は別にあるし」  
そう言つて晴明も帰つていった。



## 純白の章 鯛中派地肝

リサリサ邸

リサ「大丈夫、嘉秀さん」

嘉秀「ああ、大丈夫だリサちゃん、助けてくれてありがとう、でも驚いたなりサちゃんが魔法使いで今回の戦争の主権者の子のお姉さんなんてね」

リサ「本当にごめんなさい、あの愚弟はルルイエに送って反省させてるから、あと何私ができることならなんでもするわ」

嘉秀「それなら、俺を強化するってことはできないか？」

リサ「うーん、わかっは私の集めてた魔眼の一つをあなたに移植してあげるわ」

嘉秀「魔眼って？」

リサ「まあ簡単に言うとな魔法が込められた目、よくあるでしょ目を合わせたら石なるとかああ言うのよ」

嘉秀「なるほど、どんなのがあるんだ？」

リサ「嘉秀さんには軍略の魔眼かしら、この魔眼はまあいわば相手の情報を読み取り未来予測演算ができる嘉秀さんにぴったりの魔眼でしょ」

嘉秀「そうだな、それでいいよありがとう」

そう言っリサと嘉秀は魔眼の移植の準備をした。

ビルの屋上

道満「ンンン、次の獲物が中々見つかりませんな」

ラグナロク「なら俺が相手になってやろうか？」

そう言っ道満が振り向くとそこには、既に拳を振り抜いていた好美がいた。

道満「なっ」

道満は、対応できず殴られたそのまま屋上から落ちた。

道満「くっだが拙僧を落としたのは間違いですぞ」

そう言っ飛行術式の準備をしようとした時、

翼「それはどうかな」

そう言つて上空には幾重にも星々繋がり輝いていた。

道満「バカなその術はギリシユタリアの理想魔術そんなものをここで使うつもりですか!?あなたは」

翼「ああ、いつでも打つぜでもまずは」

好美「私の攻撃だー『偽典ミヨル万雷撃ミル・フェイち轟く雷神イカーの嵐』」

そう叫ぶと好美が持っていた戦鎚から大量の雷が放電し出しそのまま道満を撃ち抜きそのまま地面に叩きつけられた。

好美「着地任せたわよ」

ラグナロク「ああまかせろ」

そう言つて綺麗に着地すると同時に

道満「死ねえー」

それと同時に足元に隠れていた札が巨大な武者に代わり襲いかかつてきた。だが翼が全て切り裂き消しとばした。

道満「くっ流石元裏のピーストIですね」

翼「ふーん俺が作った『偽典ミヨル悉く打ち砕く雷神ミル・フェイの鎚イカー』を受けても立ち上がつて式神を使うとはな蘆屋道満」

好美「蘆屋道満つてあの陰陽師の?」

翼「そうだ、ついでに結構なクズだ容赦なく殺れ」

好美「ふふふ、あなたこそ今回はちゃんと仕留めてね」

道満「流石にまずいですな、ひとまず空が見えない位置に引かせてもらいますぞ」

そう言つて道満は逃走をはかろうとした。だがその目の前にラグナロクがスキマを開けていた。そうして出た先は完全に空が開けた場所だった。

翼「チエクメイトだ。虚空の神よ、今人類の敗北を宣言する。眼は古く、手足は脆く、知識は淀んだ。最後の人間として、数多な決断、幾多の挫折、全ての繁栄をここに無と断じよう。この一撃を持って、神は撃ち落とされる。変革の鐘を鳴らせ!『冠位指定グランドオーダー／人理保障アニマ・アミユスファイア地球』」

道満「こんなバカな!」

空から星が降り道満を完全に押しつぶし消しとばした。

サーヴァントアルターエゴ、蘆屋道満 脱落

マスター 安倍晴明 生存

## 混沌の章 第壹巻

シキの家

茅場「花音君、今いいかい」

花音「別にいいけどどうしたの？茅場さん」

茅場「シキ君からの伝言、アルターエゴが脱落したそうだ。そろそろ聖杯戦争が大きく動くだろう、と言っていた。あと写真」

そしてその写真を見て花音は顔を青ざめてしまいSANチエックしてしまった。

茅場「おやどうしたのかい、気分が悪そうだけど」

花音「うっむしろこれを見て平然としてるあなたの方がおかしいわよ」

花音が見た写真には、クトウルフが映っていた。これだけでSAN値が削れるが、なんとシキはあろうことかクトウルフの上で深き物の残骸で名前にできない奇妙な建物を建設していた。

茅場「ふむ、君もこの生活に慣れればこれくらい問題なくなるよ」

花音「問題なくなりたくないわ」

茅場「では、私は須郷君に会いに行くよ、さらばだ」

そのまま、死んだ扱いになっている茅場は、とあるトップゲームと意気投合して救済されちゃった系秀才のところに行ってしまった。

(シキは今んところはSAOの本編は書く気がありません)

花音「はぁ気分悪いし二度寝しよ」

晴明の溜まり場

晴明「道満がやられた(未来視で知っていた人)」

カグツチ「どうするんだ晴明」

晴明「大丈夫策はある」

カグツチ「策って」

晴明「出てこーい道満」

道満「くっ、はなからこれを狙っていたのですね晴明」

そこには倒されたはずの道満？がいた。

カグツチ「なんだこれ俺の夢か、もう一寝入りしてくるわ」

清明「はいはい夢じゃないよー、これで私のボンボンビーナごっこもやりやすくなったのだよ（清明の真の目的）」

そう今の道満は大体10歳ぐらいの身長の黒と白の髪を一つにまとめた幼女の格好になっているのだ。

道満「確かに自由にはなっております。聖杯戦争と関係もありませんし、ですが拙僧の性別変えるのは意味が分かりませぬぞ清明」

清明「それは、私の趣味？」

カグツチ「流石、愉悦部俺たち（カグツチ一人）にできないことを平然とやってのける、そこに痺れる憧れるー」

ここはいつも通りカオスである。

好美自宅

ラグナロク「昨日のあれの調子はどうだ？」

好美「ええ、とても使いやすくていいわ、気に入ったわ」

ラグナロク「それはよかった」

好美「そういえば残りのサーヴァントって何が残ってるの？」

ラグナロク「これは通常の聖杯戦争じゃないから残りはわからないだが確認したマスターとサーヴァントクラスと真名は、わかる」

好美「なら、教えてちょうだい」

ラグナロク「了解した。まずはこの前取り逃してしまったキャスターとそのマスター、キャスターの真名はアルトリアだったはず、次に昨夜倒したやつがアルターエゴ蘆屋道満、マスターは不明、次に前の愛しの旦那とアサシンのサーヴァント真名呪腕のハサン、そして前に同盟を組んだ衛宮士郎、サーヴァントは見えないがあいつのことで高位のサーヴァントを連れてるはず、最後に場所を移動し続けているアーチャー陣営だ、アーチャーの真名はナポレオンのはずだ以上」

好美「ふーん、次狙うとしたら誰がいいのかしら？」

ラグナロク「俺ならアサシンだけを狙う、キャスターは今どこにいるか不明な以上それが1番ベストだ」

好美「なるほどね、その後に嘉秀さんをここで監禁えはいいのかしら」  
ラグナロク「そうだな」（副音声は聞かなかったことにしたほうがい

いな)

好美「じゃあ、まあ夜に出ましよう」

そう言って好美は自分の部屋に戻った。

ラグナロク「衛宮士郎状況は、わかったな」

そう呟いた後服に隠していた札を一枚破り捨てた。

## 混沌の章 第2艦

神社

士郎「ああわかったぞラグナロク」

そういうと、士郎は持っていた札を投げると勝手に破れ綺麗に消えた。

士郎「ソル、どうやらアルターエゴは倒されたみたいだ」

ソル「ふーん、蘆屋道満どんなやつか知らないけど確か災厄の陰陽師でしょ、それよりも彼女の次の狙いがアサシンって嘉秀さんに伝えないと」

士郎「連絡取つといてくれ、俺はしばらくあいつを監視しているから、必要あれば俺があいつを倒す。どうにか破壊<sup>ル</sup>す<sup>ル</sup>べき<sup>ブ</sup>全ての<sup>レイ</sup>府<sup>カ</sup>を使つて脱落させる」

ソル「わかったは、私は嘉秀さんに持たせた連絡用の礼装で伝えとくわ」

士郎「じゃあ、行ってくるランサー任せたぞ」

ロムルス「任されたマスター、行ってくるが良い」

そう言われると士郎は即座に空を飛んでいった。

ソル「私も連絡しないと」

そう言つて宝石でできた、礼装を使い嘉秀に連絡をかけた。

リサリサ邸

嘉秀「早速、この礼装から連絡か？俺だ」

ソル「今いいかしら？」

嘉秀「多分大丈夫だ、近くにアーチャーのマスターがいるが問題ない」

ソル「わかったは、キャスターのマスターがどうやらあなたのことを狙つてるらしいから気おつけてちょうだい」

嘉秀「わかった」

そう言つて話を切ると

リサ「あら〜彼女さんと秘密の連絡かしら〜」

そう言いながら入ってくる家主、

嘉秀「違うよ、俺と同盟を組んでる子からキャスターのマスターが俺に仕掛けてくる可能性があるって話してくれたんだ」

リサ「なるほどね、でもその魔術、宝石に古い魔術を刻んでるのね」  
嘉秀「そうなのか？俺にはわからないんだが」

リサ「そうよ、多分ソロモン王の時代のものぐらいだと思うわ、あくまで感だけどね」

嘉秀「でなにしにきたんだ？」

リサ「ご飯が出来たから呼びにきたの」

嘉秀「わかった」

そう言っつてリビングに行った。

リビングで

ナポレオン「オイ、いつまで待たせるんだ。俺はもう腹ペコだぞなあ、希空」

希空「あなた、そんなキャラだったかしら？」

ナポレオン「別にいいだろ」

嘉秀「すまなかつたな、あと俺は仕事がある食べたらずぐに出るぞ」  
リサ「あらくゆつくりすればいいのに」

嘉秀「俺が勝手に休んで仕事が遅れば責任取れないからな」

リサ「考え方が完全に社畜ね」

嘉秀「うるさい、気にするな」

そう会話しながら朝食を食べていった。

そして上空

ムラサ「どうしてこうなったのかな？」

今の現状は翼がスキマに落としてそのまま上空に落とされている。

キャストリア「マスターせめて私を下敷きに」

ムラサ「いやそんなことできないよ」

そう言っつていると地面が見えてきたがそこは浜辺だった。そうして目を瞑ると

??「ぐぎゃー」

誰かを踏み潰してしまつたみたいだ。

ムラサ「大丈夫ですか!？」



?? 「大丈夫だ、問題ない」

そのまま自分のことを背負って立った。

ムラサ 「あっもう一人落ちてきます」

?? 「おっそうか、この龍牙様ドラゴンに任せなさいい」

そう言つて上を向こうとする前に、頭の上にキャストリアが降つてきて再び下敷きになった。

## 混沌の章 第三缶

浜辺

ムラサ「本当にごめんなさい」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「べつにいいよ、よくあることだから」

ムラサ（よくあることなんだ）

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「それよりなんで上から降ってきたんだ？あつちなみに俺は、星

流火<sup>ドラゴン</sup> 龍牙職業はグレイゾーンの仕事ね、よろしく」

ムラサ「ええ、私はムラサ キケマン、そっちの子がキャスター、落ちてきた理由はちよつと言えませぬ」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「まあ言えないならいいけど体とか大丈夫か？」

ムラサ「問題ありません」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「そうじゃあ俺は帰るからじゃあな」

そう言つて帰つていった。

ムラサ「はあ、いい人それで良かった」

夏油「そうだね、だけど周りを見ず警戒しないのはよくないよ」

ムラサ「えっ」

ムラサが声をかけられて気づいた時には何かにアルトリアごと吹き飛ばされていた。なんとか体勢を立て直し相手を見ると、胡散臭そうな見た目の男とその後ろに青く目が左右合計六つある龍がいた。

ムラサ「あなた一体何者」

夏油「それで何者なのか話す人はいないと思うよ」

キャストリア「マスター下がってください、あの人は危険です」

夏油「私に注目するのはいいけどさつきも言ったけど、周りを見ずに警戒しないのは良くないよ」

キャストリア「まさか！」

零「そのまさかさ、原点回帰極点呪術極ノ番『無之極致』」

そう言つた瞬間、零以外の思考が一瞬止まった。その一瞬で零が特急呪物雲外鏡から特急呪具天沼鉾を取り出しムラサの令呪のある右手を切り落とした。

零「なるほどね、令呪<sup>これ</sup>の仕組みはわかったわ、そこの子令呪<sup>これ</sup>の一角

を使って命ずるは私たち側に来なさい」

そう言われるとアルトリアは令呪で従われ、

夏油「さてこれでとどめかな」

そう言つて青い龍に命令を下そうとした瞬間

ドラゴン龍牙「その龍、『動くな』」

そう言つた瞬間完全に止められた

夏油「なっ呪言師か！」

そう言つて相手の方に振り向こうとした瞬間すでに拳があり、殴られていた。

零「術式順転 ホワイト白」

指先に白い球体を作り出し放とうとしたが、

ドラゴン龍牙「俺時空龍の時間」

そう言つた瞬間周りが停止し気づいたらドラゴン龍牙とムラサがいなくなっていた。

夏油「逃げられたみたいだね」

零「はあ、さとりんと言ひ私が殺しをしようとした時ほんと邪魔が入るね」

夏油「まあ仕方ないさ、人生うまくいく方が珍しい、それに今回の目的は彼女だ」

そうしてアルトリアの方を指す

零「それもそうね、今起こってる戦いに間違いなく安倍晴明が参戦している。絶対見つけ出さないよ」

夏油「そうだね」

そう言つてアルトリアを無理やり捕まえて動けるようになった青い龍に乗りそのまま飛んでいった。

そして昼シキの家

花音「ねえこれなに？」

シキ「おいおいそれをこれ扱いするなよ、仮にもクトウルフなんだからさ」

シキはまた邪神をぬいぐるみにして帰ってきた。

花音「わたしのSAN値どれだけ削れば気が済むのかな」

シキ「この程度でS A N値削れねえだろ」

花音「はあ、怒るだけ無駄ね」

シキ「そう言えばさつき、変な奴らがキャスターのマスターから令呪を奪ってマスターになったぞ」

花音「なにそれ！どういうことよ」

シキ「悪いが俺も海ルルイエから上がったばっかだったから詳しくは知らねえよ」

花音「キャスターのマスターはどこにいったの」

シキ「天皇星流火 氷河アイスの邸宅だ」

花音「なっ、なんでそんなところに行くのよ」

シキ「あいつの弟がたまたまそいつのことを拾ったから今治療を受けてるはずだぜ」

花音「少し見てくるわ」

そう言って花音はアビーを連れて外に出ていった。

シキ「さて、今度は真面目な話するために晴明のところに行くとするか」

そう言ってシキも外に出ていった。

## 混沌の章 台ヨン奘

零達の拠点

零「さて君たちが何なのかはなしてもらうかな」

キヤストリア「話すわけない」

夏油「零アレをもう一度切るのはどうかい？」

零「そうね、一つ残っていればこの子を残すことができるし、一角使って命ずるこの場限りで私の質問に全て答えなさい」

夏油「これでいいね、じゃあまず君の名前を聞こうか？」

零「なぜか犯罪臭がするのだけど、あとあえて私だけに限定したから質問に答えないと思うわよ」

夏油「そうなんだ、あと私たちがやってることは、紛れもなく犯罪だよ」

零「いや、今のシーン胡散臭い男が少女と一緒にいるって意味よ」

夏油「それを言われると終わりなんだけど」

零「それは置いといて、改めて『君の名前は何か？』」

キヤストリア「くっアルトリアです」

零「どうやらうまく行ったみたいね、次に『今ここで何が起こってるの？』」

キヤストリア「今は聖杯戦争が行われてるわ」

零「なら『その聖杯戦争って何？』」

キヤストリア「どんな願いでも叶える願望器をかけた戦い」

零「へえーいい拾い物できたねすぐるん」

夏油「そうだね、零」

そう言って二人はアルトリアを拘束したままこの部屋から出て行った。

キヤストリア「申し訳ありませんマスター」

場所は変わって清明の溜まり場

シキ「清明今回は普通に話を聞きにきたぞー」

シキが来てそして

シキ「帰るは、じゃあな」

180度回転してそのまま帰ろうとしていた。

道満「待つてくだされ、監督役殿拙僧を助けてくだされ」

と懇願されてシキは現実を見た、現状晴明と幼女道満が魔法少女ボンビーナのコスプレしてステッキ持って遊んでいた。知らない人が見ればただ子供が遊んでるようにしか見えないが、シキから見たらいい歳した大人がコスプレしながらごっこ遊びしているふうに見える（道満に関しちや元男でもある）

シキ「はあ、少し聞きたいことがあるんだがいいか？晴明」

晴明「ええ、仕方ないな、いいよ聞いてあげようじゃないの」

シキ「まずはこれからだ」

と写真を見せた

晴明「相変わらず謎技術だね、本来これ写真とかに映らないのに、これについて聞きたいんだったら答えは呪霊、人の呪いから生まれた怪物まあ現にいる穢つて考えてよ」

シキ「じゃあその呪霊を操ってるこいつらは知ってるか？」

晴明「多分こつちの男の子は呪霊を操る能力を持つてるんだよ、でこつちは私が探してる子孫の一人だよ」

シキ「まだ他にいたのかよ」

晴明「少し違うよ、この子は聖子の従姉妹だよ」

シキ「やれやれ、でこいつらが色々やらかしてくれてな、対処してくれねえか？報酬にボンビーナ秋葉限定フィギュア出す」

晴明「乗った、カグツチ、行ってきた私はずっと聖子に話してる」

カグツチ「やれやれ行ってくるよ」

シキ「助かる、じゃあ俺帰るわ」

そう言って全員が行動した。

道満「拙僧一体どうすれば？」

一人置いてけぼりにされた。

## 混沌の章 大ご巻

天皇の邸宅

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「ふう、やっと終わった」

氷河<sup>アイス</sup>「終わったかじゃあさつきと帰れ」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「いや家ここだからな」

氷河<sup>アイス</sup>「お前の家は南極だろ」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「何でだよ」

氷河<sup>アイス</sup>「どうやら誰か来たようだな」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「どうするんだ氷河？」

氷河<sup>アイス</sup>「あつてから決める」

そう言つて部屋から出て行つた

花音「ここが天皇の屋敷、いきなり来たけどあつても会えるのかな？」

アビー「会ってもらえなかったらどうするの？マスター」

花音「その時はその時よ、とりあえず呼び鈴を鳴らしてからよ」

そう言つて呼び鈴を鳴らそうとするといきなり門が開き

氷河<sup>アイス</sup>『用があるなら入れ、ただの遊びなら帰れ』

そう言われたので花音はおとなしく入つて行つた。

リサリサ邸

リサ「であなたはこれからどうするの？」

希空「そうねえ、ひとまずは大人しくしてるつもりよ、シキに挑んでわかつたわ、今のままじや彼の足元にも及ばないって、あなたのことを信じるは、それに彼には彼なりの考えがあるみたいしね」

リサ「その方がいいわね、シキってキレてもまだ『想像具現異界』使つてなかったし」

希空「『想像具現異界』って何？」

リサ「そうねえ、あなた固有異界又は領域って知ってるかしら？」

希空「それぐらいは知ってるは、自分の心象風景で世界を塗り潰す魔法でしょ」

リサ「そう、『想像具現異界』はいわばその上位互換よ」

希空「上位互換って具体的にどんなにすごいのよ」

リサ「世界を一度展開したら維持に使う魔力は必要ないわ」

希空「嘘流石にそんな出鱈目なこと」

リサ「できるのよ、私もできるは、固有結界すら使ったことないけどやろうと思えばできるわ」

希空「でも世界の修正はどうするのよ」

リサ「それは簡単よ、今ある座標とは微妙に違う虚数時空に自分の世界を創り出すのよ、塗り潰すわけじゃなくて新世界の創造の方がいいわね」

希空「むしろ難易度が上がってるわよ」

リサ「当然でしょ、でも使えるようになったら便利よ、私は真実の上書きした方が強いからしないけど」

希空「シキってどんな世界を想像するの、絶対ロクでもない気がするけど」

リサ「ああ、シキのは『無限狂宴地獄』って言って入った者それぞれのも恐ろしい景色を映し続ける世界を想像するのよ、あの世界じゃ狂ったやつがまともになる世界、あなたが入ればもって10秒かしら?」

希空「それは流石に言い過ぎでしょ、これでも修羅場は何度も潜り抜けてきたのよ」

リサ「はあ、シキのあれはそういう次元じゃないのよ、まず狂気化に怯えた時点で論外なのよ」

希空「うっ」

リサ「それか、あなたもその領域に踏み込んで中和するかのどっちかよ」

希空「流石に無理よ」

リサ「なら私が教えてあげましょう、この『真実の魔女』が」



## 混沌の章　ダイ六缶

天皇の邸宅

氷河「やつときたか、ここに誰の招待できた」

花音「えっ？」

氷河「まさか誰の招待も受けずにきたとは言わないだろ、このことを知ってるのは俺の知り合いだけだ」

花音「えっと、シキつてわかります？」

氷河「あのバカかってことはお前う p 主ズの新入りか？」

花音「違うけど、てかなにそれ？」

氷河「動画投稿サイトであいつ動画投稿してるんだよ。あいつがコラボしてるやつの集まりをう p 主ズって言うんだよ」

花音「あいつもうなんでもありね、世界滅ぼしてもう驚かないわ」

氷河「あいつならついこないだ世界滅ぼしかけたぞ」

花音「あいつなにしでかしたのよ」

氷河「確か邪神三柱同時降臨を起こしたな」

花音「は？」

氷河「知らなかったのか？いやあいつのことだからあえて黙ってたな、はあ」

花音「ちよつと待ってあいつが召喚したのってどの邪神」

氷河「アザトース、ヨグソトース、ニャルラトホテプこの三柱同時降臨だな」

花音「あつ、だからあいつ自分のせいって言ってたのね、でなんでそのメンツを召喚したわけてかよくニャルラトホテプ呼べたわね」

氷河「いつもの遊びだぞ、流石に被害が大きくなりすぎたから自分の手で還したみたいだけだな」

花音「もう一周回って怒る気にもなれない」

氷河「でだなにしにきたんだ？」

花音「あつごめんさい、今日ここにいる女の人に用があつてきたの」

氷河「へえ、わかった翔、ドラゴン龍牙を呼んできてくれ」

そういうと、部屋の外から足音が聞こえて遠ざかっていった。

氷河<sup>アイス</sup>「しばらくしたら多分来る、少し話をしよう、暇だったし」

花音「話ってなにをするのよ?」

氷河<sup>アイス</sup>「そうだな、ならなんでも質問してくれ答えれる範囲ならなんでも答えよう」

花音「じゃあこの世界の日本と私の世界の日本について知りたいわ」

氷河<sup>アイス</sup>「お前違う世界から来たのか?」

花音「そうよ、私の世界について説明するわね」

少女説明中

氷河<sup>アイス</sup>「なるほどなお前ら星見一族が皇族でお前らの魔術で第二次世界大戦に勝利したのか、頭おかしいな」

花音「いや、原爆を真つ二つにして防いだとか意味わからないこと言ってるあなたよりマシよ」

氷河<sup>アイス</sup>「それやったの竜玄って言う日本の世界大戦時の英雄がやったことだから」

花音「そんな人いたのに負けたのね」

氷河<sup>アイス</sup>「いくら一人の力が優れてようと戦場をひっくり返せるほどのものじゃなかったってことだな、軍艦何隻か一人で沈めたりしてたらしいけどな」

花音「やっぱりおかしいでしょ」

氷河<sup>アイス</sup>「日本以外にも同じ次元のやついるからな」

「そうやって話し合っていると、」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「氷河呼んだか?」

氷河<sup>アイス</sup>「お前が連れてきた怪我人に用があるらしい」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「なんのようだ?」

花音「彼女に怪我を負わせた人について詳しく聞きたくて」

龍牙<sup>ドラゴン</sup>「わかった、今は俺の部屋にいるからついてきてくれ」

「そうやって花音を自分の部屋に案内した。」

## 混沌の章 弟那奈感

天皇の邸宅 ドラゴン 龍牙の部屋

龍牙「ドラゴンここが俺の部屋だ、何かあつたら呼んでくれ俺は氷河のアイスところにいるから」

そう言つて自分の部屋を後にした。

花音「お邪魔するわよ」

ムラサ「あなたは？」

花音「花見 花音聖杯戦争フォーリナーのマスターよ」

ムラサ「もう脱落した私になんのように」

花音「あなたを脱落させた人について聞きたいのよ」

ムラサ「わかつたわ、なにが聞きたいの？」

花音「まずなんで戦つてたの？」

ムラサ「あいつらの目的は多分サーヴァントよ私も令呪とキャスターを連れ去られたわ」

花音「なるほどね、じゃあ他に相手がなにができることとかはわかるかしら？」

ムラサ「変な怪物を操ることができるやつと一瞬意識を飛ばすことができるやつよ」

花音「じゃあ最後にあなたは聖杯戦争を続けるの？」

ムラサ「続けるに決まつてるじゃないの、キャスターと一緒に勝つ、まずあいつらからキャスターを取り戻す再契約もする絶対に」

花音「わかつたわ、じゃあね」

そう言つて花音は部屋を出て氷河アイスたちに帰ることを伝えてから帰った。

そして昼喫茶店

八雲「嘉秀さん、今日は来てくれてありがとうございます」

嘉秀「別に構わないよ、それでなんのようかな？」

??「用があるのは俺だ」

八雲の横には黒上のロングヘアの男装をした女の子がいた。

??「あんた今、俺を女と思つただろ」

嘉秀「気のせいだよ、で俺になんのようかな？」

??「まず自己紹介だな、俺は坂本 恋不可思議探偵事務所の社長な、そっちの自己紹介は不要な八雲に聞いてるからな、用は簡単だ、今回のあのシキがやらかしてることについて参加しに来た。元々解決までが依頼だからなさつきと終わらせないと依頼取り下げなんてされたら死活問題だからな」

嘉秀「なるほどね、元々八雲くんが協力してくれるだけでありがたい、こちらこそ頼むよ」

恋「後その目なんだ？八雲からは魔眼を持つてるとか聞いてないぞ」

嘉秀「あっこれは知り合いに貰って」

恋「リサだな」

嘉秀「そういえばそこに繋がりあるんだったね」

恋「最後に個人的な質問だがいいか？」

嘉秀「なんだ？」

恋「好きな歴史上の人物って誰だ？」

嘉秀「なんで聞くんだ？」

恋「ちよつと賭けをしてるんだ答えてくれ」

嘉秀「よくわからないが、真田幸村と土方歳三だな」

恋「チツ」

嘉秀「なんで舌打ちしたし！」

恋「真田を好きなのは許すが土方テメエはダメだ」

嘉秀「なんでだよ」

八雲「恋つて一様坂本龍馬の子孫だからだな仕方ないよ、それに賭けしてる相手が沖田総司の子孫でもあるから」

嘉秀「一体どんな賭けだよ」

恋「維新VS新撰組好きな偉人多い方がイス1ヶ月分かけてるんだよ」

八雲「ちなみに戦績は維新が5人新撰組が7人嘉秀さんのも入れて8人になりましたよ」

嘉秀「なんかごめん」

恋「許さん」

八雲「じゃあそろそろ帰ろうか恋」

恋「チツそうだな」

嘉秀「今日の夜から俺は動く予定だ、俺の感だが多分今夜で戦場が  
一気に動くはずだ」

恋「わかった、俺たちも隠れて見とく何かあれば呼べよ」

そう言つて二人は帰つていった

そして戦場が動く運命の夜の時間が始まった

## 混?の章 第8巻

### 4日目夜

ハサン「マスター殿本当によろしいのですか、ご自身を囮にするようなことを」

嘉秀「ああ別に構わない、1番狙われるのはお前なんだお前の方が気をつけろよ」

ハサン「心得ています」

そうして二人で行動していると、後ろから毒が塗られた投げナイフを投げつけられないでいた、

ハサン「アサシンである私を差し置いて暗殺とは舐められたものですか」

それをあつさり受け止めて投げた犯人に投げ返した。

ラグナロク「流石に不意打ちで仕留めることはできないか、まあ当たれば儲けもの程度のものだからいいんだけどな」

嘉秀「アサシン勝てるか？」

ハサン「マスター殿が勝てと申すのであれば勝ちましょう」

嘉秀「精神論の話じゃなくて客観的に見てだ」

ハサン「無理でしょうな、相当高位の英霊なのでしよう私じゃ勝ち目はありませんね」

嘉秀「わかった、じゃ勝ちに行くぞ」

ハサン「かしこまりました。確実な勝利をあなたに」

ラグナロク「勝ち目がないってわかって挑むとは勇者だな、手始めに『闇払い』」

そう言うとき夜が嘘のように晴れ周りに見えやすくなり隠れる影がなくなった。

ハサン「なるほど先に我らの武器を奪ったってことですか、これは厄介ですね」

ラグナロク「さて正々堂々やり合おうか」

ラグナロクは自身の宝具の刀を抜き、ハサンに向けた。

ハサン「キヤスターが剣士の真似事とはあまり我ら暗殺者を舐める

なよ」

ハサンも左手でナイフを持ち構えた。ぶつかりあった、そして嘉秀魔眼を発動させた。

嘉秀（特に何か自身にバフのようなものはかけてないようだな、あの動きだと筋力はハサンが勝っているが敏捷はあいつの方が勝っている、それにあの目の動き魔眼か何かだなそれでこっちの動きを先読みしているな、だが全力を出しきっていないな、マスターが背後からハサンをとる気だな、それに俺の身も気にかけてるようだな、なら）そこまで思考した後、すぐにラグナロクの一撃に割り込んで自身を盾にした。ラグナロクはそれに驚きその一撃をずらして当たらないようにした。

嘉秀（確定だな、こいつは俺に攻撃は出来ない）「アサシン命令だ俺を盾にしなからこいつに攻撃しろ」

ハサン「!?わかりました」

ラグナロク「はあ!?そんなバカな」

ハサンはラグナロクと正面になるときにその間に嘉秀が来るように動きナイフを投げつけた。ラグナロクは一気に後ろに飛びナイフを回避して

ラグナロク「お前頭おかしいじゃねえの、マスター作戦変更だ不意打ちは無理だ真正面から行くぞ」

好美「だから言ったのよ、そんな小細工する暇あるなら真正面から殴った方がいいって」

ラグナロク「そうだったなまさか自身を盾にするとは思わなかったな」

嘉秀「確か君は姉小路 好美さんだったかな?はじめまして」

好美「嬉しいは、私の名前知ってくれてたのね、そうよ私は好美末長くよろしくね」

嘉秀「八雲くん恋くん彼女のことは任せていいかな」

そう言うのと好美たちの後ろから空間が歪み八雲と恋が現れた

八雲「別に構わないですよ」

恋「むしろ俺たちがそっち相手しようか?」

嘉秀「いやいいこつちは俺が盾になるだけで攻撃できなくなるからな」

ラグナロク「まさか一般人を巻き込んでるとはな、やられたなどうするマスター出直すか？」

好美「いいえ、ここで決めるは、私を強化しなさいキャスター」

恋「目の前に俺たちがいるのにやらせるとても」

そう言つて恋は即座に居合いの構えで一氣に好美に接近して

恋「坂本家一刀流奥義リボルバー」

そう言つて刀から手を離し懐にあつた拳銃を抜き放つた。好美はそれを目で弾丸を追い回避した。

好美「それ剣術かしら？」

恋「当然だ」

八雲「絶対に違うだろ、まあいい『目を壊す』」

そう言いながら八雲は恋の後ろから現れ手で触れようとした、好美はそれを回避したがそのまま手に触れた地面は一氣に破壊され、ラグナロクと分断された。



## #??の章 第9△

### 4日目夜

ラグナロク「チツ自分のマスター盾にしやがって英霊としてのプライドはないのか！」

ハサン「我々は影に生きる者、今回のオーダーは貴様の首、そして」  
嘉秀「俺自身が盾にしろって言ってるんだなんの問題もないだろ」

ラグナロク「クソ」

ラグナロクは嘉秀の後ろにいるハサンに向けて突きを放ったが、嘉秀はその突きに左手を貫かせ押さえ込んだ。

ラグナロク「なっ!？」

そして右手を掲げ

嘉秀「アサシン令呪を持って命ずる『宝具を当てろ』」

ハサン「マスター殿が作ったこのチャンス、逃しません、魂など飴細工よ…… 苦悶を零せ。『妄想心音』<sup>ザバーニヤー</sup>」

ラグナロクは自身の宝具の刀を離し、避けようとしたが、令呪の影響で不自然な動きをし捉えられ、そして右手に現れた擬心臓核を破壊した。

ラグナロク「グハ」

ハサン「これで終わりですな」

嘉秀「アサシン、油断するな！」

そう言ったが、ラグナロクは心臓を潰されたのにも関わらずハサンの右腕を手刀で切り落とした。

ラグナロク「やってくれたな、俺が心臓がなくても活動できなかつたら死んでたな」

ハサン「くつぬかったか、私としたことが」

嘉秀「アサシン相手は相当弱ってる、それに俺たちの勝ちだ」

ラグナロク「何言ってるんだ」

花音「こう言うことよ」

そう言って上空からアビーと一緒に飛び降りてきた花音が来た。

ラグナロク「はぁ完全に詰んだな」

好美「あははははは、もう終わりにしましょう」

そう言つて好美は右手を掲げていた。

ラグナロク「まさか!？」

少し時間は巻き戻り

八雲「さて恋どうする」

恋「とりあえず切るに限るだろ」

八雲「お前蒼子のこと文句言えないだろ」

恋「はあー、あの弱小人斬りサークルと一緒にするな」

八雲「別にあいつそう言うのに所属してないからな」

恋「さて悪ふざけはここまでにして『幻華』妖刀化」

そう呟くと恋の右半身が黒い文様が現れ背中からは悪魔のような翼が生え目の色が白いところが黒くなり黒いところが赤くなり、左半身からその逆の天使のような羽が生えて白色の紋様が現れた

八雲「俺は少し消えているぞ『目が消える』」

そう言つて八雲は姿が消えた

恋「さて、いくぜ、『坂本流剣術奥義ドラゴンスピリッツ』」

そう言つて地面を蹴り加速して接近するうちに赤い半透明な龍に変わりそのまま突撃してきた。

好美「それが何」

そう言つて『偽典悉く打ち砕く雷神の継(ミョルミル)』で殴り弾き返した。

恋「あら意外に脆いのねえもう一人の子は出てこないのかしら？」

そう言つて恋から視線を外した。その瞬間弾かれた後壁や地面、自身が張った結界を足場に上空から恋が降ってきた。

好美「何度やっても無意味よ」

もう一度弾こうとしたが今度は弾き返すことはできたが自身も吹き飛ばされた。そして吹き飛ばされた恋はまた何度もバウンドして再び突進してきた。

好美「なるほどね、それってバウンドするたんびに威力が上がってるのね、なら次は真名を解放して一撃で沈めるだけね」

八雲「恋に集中するのは良くないよ」

そう言つて空間が歪み八雲が現れ持ち手の先がリングになつてるナイフを投擲していた。

好美「くっ厄介ね」

そう言いながら回避し、恋にも対応していたが、突然歪な形のナイフが無数に飛んできた。それに気を取られている間に好美はドラゴンスピリッツをまともにくらい吹き飛ばされてしまった。

好美「あははははは、もう終わりにしましょう」

ラグナロク「まさか!？」

好美「令呪三つを使って命じるは『ラグナロク災害の獣へと堕ちなさい』」

人類悪 仮想降臨

好美「アハハハハハハ、これで全部終わりよさあ全て滅ぼしてちよ  
うだい」

そう言つてラグナロクに命令をくだすが

ラグナロク「ハア、やれやれ俺が焚き付けた事とはいえ本当に気づ  
いていないようだな」

好美「どう言う事、早く従いなさいよ」

ラグナロク「既に俺を縛る令呪は無くなった、俺はお前の命令に従  
う理由はもうない」

好美「なっ!？」

ラグナロク「さて、お前を消してとつとと退場させてもらうぞ」

そう言つて自身の宝具の刀を取り出して振り切ろうとした。その  
瞬間

嘉秀「させるか!？」

そう言つて好美の前に出ていきラグナロクの刀を手の甲に当てて  
受け流した。

好美「嘉秀さん」

ラグナロク「へえー意外だなその女を庇うとはな」

嘉秀「当然だ目の前に自分の好きな人が殺されそうになって助けな  
い男はいない」

ラグナロク「あっそうなら、お前ごと切らせてもらおうぞ」

恋「やらせるわけねえだろ」

そう言つてドラゴンスピリッツ状態で間に入りラグナロクを吹き  
飛ばした。

八雲「嘉秀さんその人を連れて逃げてくださいじゃないとほんとに  
死にますよ」

そう言つて八雲も走つて追っかけていった

嘉秀「行くよ好美さん、君のことは俺が守るから」

好美「はい」

嘉秀「アサシン悪いがもうちよつと働いてもらうぞ」

ハサン「まかされました、マスター殿全霊を持って守りましょう」

花音「私はあのラグナロクつてやつを追いかけるはあととは好きにしにしてちようだいじゃあね」

そう言つて花音とフォーリナーもラグナロクのところへ向かった。

場所は変わつてビルの上

零「乱入しようと思つたらめつちややばいことになってるね、スグ  
ルン」

夏油「これじゃ私達が乱入するのは難しそうだね。どうする零」

零「どうするもないよ、しばらく見学だよ、こんな超次元の戦い滅多に見れないし、ものにできるものは吸収しないと」

夏油「そうだね」

そう言つて傍観に徹しようとした瞬間、

カグツチ「ヒヤッハー」

そう叫びながら三叉槍を振り回して突っ込んできた

夏油「青龍、受け止めろ」

そう言いながら青い六目の龍を突撃させたが

カグツチ「邪魔だ」

三叉槍で青龍を弾き飛ばしそのまま炎を放ってきた。

夏油「青龍が飛ばされて!？」

零「くっ逃げるよ」

カグツチ「逃さねえよ『爆炎剣紅蓮炎牙』」

炎が纏つた槍がそのまま零に向かって投げられた。

零「あんまり使いたくないけど」

そう言つて槍がそのまま零の目の前で止まった。

カグツチ「無下限呪術か」

零「正解あなたじゃ私に近づくことはできないわ」

カグツチ「いいや、簡単に無限ぐらい突破できるぜ」

こちらでもとてつもない戦いが始まり出した

災害の× ● 1 △

零「術式反転赫」

零はそう言って指先に赤い球体を作り出しそのままカグツチに放ったが

カグツチ「無駄!!」

槍で弾き飛ばしたそのまま突撃でしてきた。

零「おかしいでしょ、無限の反発力を弾き飛ばすっていったい何なのよ」

カグツチ「ツツコミは厳禁だぜ」

そう言って槍で突いてきた。今度は目の前で止まらず、そのまま零に突き刺さったが夏油の呪霊が犠牲になり一気に後ろに飛んで距離をあけた。

零「もう、一体何なのよ」

夏油「少なくとも大人しく逃げることに集中したほうがいいね。いざとなれば彼女を置いていけばいいし」

零「そうね、私が赫を地面に放つからその間に逃げるわよ」

ムラサ「逃すと思う、キャスターを返してもらおうわ」

零「負けたくせにきたのね」

ムラサ「当然よ、凄く助っ人もいるんだから」

夏油「後ろの彼のことかな？」

後ろのカグツチを差しながら聞くが

??「残念、俺だ」

夏油の後ろからいきなり声が聞こえて振り返る間もなく裏拳で吹き飛ばされた。

夏油「なっ!?!何で貴様が生きているのだ伏黒甚爾」

甚爾「いいや、俺は死人だ。まああの世で稼ぎのいい仕事を見つけただけだ。さて今度は何時間持つかな」

そう言ってポケットから絶対に入らないような刀を一本取り出して

甚爾「黄泉軍軍団長伏黒甚行くぜ」

そう言つて夏油に切りかかった。

夏油「私はこのボス猿をどうにかする、零そつちの方は任せるよ」  
零「正直キツイけど任された」

カグツチ「お話は終わりか？じゃあ第二ラウンドだ」

そう言つてカグツチは炎を纏つて突撃してきた。

場面夏油の方に移り

夏油「くっ相変わらずの身体能力だ、一気に決めるしかないか」

甚爾「やれるもんならやってみろよ」

夏油「なら行かせてもらおう。『領域展開 纏 呪装変転』」

そう言つると同時に手で印を結ぶ

甚爾「失敗か？いや、違うなテーマ自身自身の中に領域を展開したのか」

夏油「一体どう言う勘をしているんだ。これでも私のじまんの技なのだぞ。まあいい一気に決めさせてもらうぞ」

そう言つると同時に夏油の腕が白い虎のような腕になり一気に甚爾の目の前に接近し腕を振った。それを甚爾は刀で受け止めて刀を持つていない方で殴りかかった。その拳を夏油の背中から現れた赤い翼で受け止め空に飛んだ。

甚爾「なるほどな、お前の通常の領域はただの呪霊庫でしかないが自らの中で展開することで一時的に取り込んだ呪霊の術式と肉体を融合させてるのか」

夏油「その通り、さて今の私の呪霊の数は2000ぐらいしかないがお前みたいなボス猿を殺るくらいいけない」

甚爾「やれるもんならやってみろ」

そして二人はぶつかり合った

## 災害の章 第2巻

零「いや無理、格好つけたけど流石に勝てない」

カグツチ「なら大人しく捕まれ」

零「あれ以外ね、私を倒しにきたと思ってたんだけど」

カグツチ「大人しく捕まってもらうぜ」

零「悪いけど逃げさせてもらうわ」

そう言つて零はカグツチに向けて何かを投げつけた。カグツチはそれを斬り落とそうとしたが、

ムラサ「ちよつと待つて！」

カグツチはその言葉に反応して攻撃をやめたがそのせいで

零「術式反転赫」

足元に赫を撃ち込みカグツチは弾き飛ばされ

零「スグルン逃げるから手を出して！」

そう言つて夏油に言うとか甚爾をなんとかして弾き飛ばして手を出した瞬間、零が手に触れそのまま瞬間移動したように消えていった。

カグツチ「あーあ逃しちやった。まっいつか」

そう言つてカグツチも帰つていった。

ムラサ「ふう、よかつたこれで大丈夫ね」

そう言つて投げられた物である切り落とされた自身の右手を拾い

ムラサ「アルトリア、不甲斐ないマスターだけでもう一度契約して

くれないかな？」

そう言つてアルトリアに話しかけた。

キャストリア「はい、私はマスターのサーヴァントですから」

そう言つた瞬間ムラサの右手に最後の一角が移った。

甚爾「嬢ちゃんこれで任務終了か？」

ムラサ「はい、ありがとうございます」

甚爾「じゃあ、俺は帰るわ」

そう言つて甚爾は帰つていった。

場面は変わり嘉秀

嘉秀「アサシン！まだ狙撃者は見つからないのか」



ハサン「申し訳ありません、どうやら我々が確認できていないアーチャーのサーヴァントの様な者がいるようで、視認できる範囲には狙撃手はおりませぬ」

そう話している間でも歪な形をしたナイフが複数好美を狙うように飛んできていた。

嘉秀「クソ、このままじゃジリ貧だ。」

そうして逃げていると、ソルがいた

嘉秀「ソルちゃんか！ちようど良かった。ここに今狙撃者が居るんだ。俺たちはこのまま逃げ続けるから狙撃者を探し出してくれないか？」

ソル「ごめんなさい、それは出来ないわ」

そう言うと同時に魔法陣を展開しアサシンを拘束した

嘉秀「なにをするんだ！」

士郎「それはこっちのセリフだ」

そう言いながら士郎が後ろから現れた。

好美「さつきから狙ってたのはあなただったのね」

士郎「そう言うことだ。ラグナロクをビースト化させたのは流石にやりすぎだ、悪いが脱落してもらおうぞ」

ソル「嘉秀さん、その女を渡してちようだい無駄な争いはしたくない」

嘉秀「断る、俺は好美さんを守るって決めたから」

そう言うのと好美を庇いながら拳を向けた。

ソル「そう、じゃあ少し本気出すわ」

そう言うと同時にソルは本来の姿に変わった。

嘉秀「それが君の本来の姿なのか？」

ソル「そう、これでも【グランドキャスター】の資格を持つ英霊よ、できれば降参してほしいわ」

好美「なら、あなたの相手は私がするわ」

嘉秀「！危険だよ」

好美「大丈夫よ、覚悟は決まったから」

士郎「話し合いは終わりだ。」

【体は剣でできている

潮鉄で心は硝子

幾たびの戦場を超え無敗

我が身は究極の一して

我が身は無数の剣である

磨いてはここに一人、孤高の剣に肩をかける

ならば我が身は一人ではなく

この体は無限の剣でできている！」

そう言った瞬間世界は塗り変わった。

その世界はあらゆる宝具が突き立てられた世界、その宝具一つ一つが輝き世界を彩っている世界だった。

嘉秀「これってりさちゃんが言っていた。固有結界か」

士郎「違う、これは俺が使える【第六魔法】の力の一端、侵食固有異界だ」

ソル「これが最後よその女の人を渡してちょうだいあなたじゃ私たちには敵わないわ」

嘉秀「それでも、俺は諦めない例え悪と罵られようと俺はお前を超えていく、来いよ正義の味方俺の覚悟見せてやる」

士郎「悪いが時間がない全力で行くぞ」

## 災害の章 第3巻

嘉秀「行くぞ！」

その声と同時に嘉秀は魔眼を起動させ、士郎は両手に夫婦剣能力干将・莫耶を異界内から引き寄せ、好美はソルに向けて拳を握りソルは大量の魔法陣を展開し迎え打てるようにした。

そして嘉秀は士郎の方へと走り好美は逆にソル達から背を向けて走り出した。

士郎「ソル、好美を追え」

ソル「わかった、気おつけてね」

ソルは好美を追って消えた。

そうして士郎は嘉秀に向かって双剣を投げつけ自身の手に新たに同じものを作り出しそのまま嘉秀に斬りかかった。

嘉秀は投げられた双剣を避け攻撃をいなし続けながら投げられる双剣も目で追いながら素手で受け流していくそして

士郎「引き合え干将・莫耶」

それと同時に投げられていた双剣が嘉秀の真後ろに引き寄せられる様に戻ってきた。

嘉秀は後ろから飛んできた双剣の片方を掴み取り回転しもう片方を弾き飛ばしそのままの勢いで士郎に双剣を投げ返した。

士郎はそれを自身の双剣で破壊し斬りかかった。嘉秀はなんとか受け流しているがどんどん傷を増やしていった。

士郎「これで終わらせる

聖槍、将来

神を殺す我が神槍、受けるがいい

神殺しの聖槍」

そう言うと同時に士郎は白い二又の槍取り出し強力なレーザーを放った。

その瞬間

シキ「なかなか面白いことになってるじゃねえか」

そう言いながらシキがいつもの歪な形をした剣を取り出しそれを

盾の形にしてレーザーを受け止めきった。

士郎「なぜ止める、監督役がそんなことしていいのか」

シキ「別に俺なんちやつて監督役だしさっきの演説聞いてこいつが気に入ったからな助けに入つてやったのさ、それにお前の中に【白痴の魔王】いるだろそれにも興味を持つてな」

士郎「なんでそれを！」

シキ「そりや見ればわかるさ、さてアサシンのマスターこいつは俺が抑えてやる早くあの女のところに行きな」

嘉秀「よくわからないが？わかった」

そう言つて嘉秀は好美の方へと向かつていった。

士郎「チツ面倒な事しやがつて」

シキ「なら普通にあの人類悪とのパスを切らしてくれつて言えばよかつただろ」

士郎「いやそうだが、いちいち説明してる時間ないだろ」

シキ「やれやれまあいざとなれば俺がどうにかするしどうする？このまま俺とやりあうか？」

士郎「いや遠慮しておくよ、その代わりに監督役お前がパス切れよ」

シキ「へいへい」

そう言つと同時に士郎は侵食固有異界を閉じた。

嘉秀は好美達を置いていけると魔法陣に囚われたアサシンを見つけた。

嘉秀「無事かアサシン！」

ハサン「無事ですぞマスター殿ですがこの拘束がある限り私は引き摺られたままなのです」

嘉秀「えっここまで引きずられてきたのか？」

ハサン「はい、どうやらソル殿は私を拘束してることを忘れて魔法陣ごと動いておられます」

嘉秀「なんかどんまい」

ハサン「それで済まさないで欲しいのですがそれより敵はどうしたのでしょうか？」

嘉秀「あつ彼なら突然監督役が現れて戦闘を引き受けてくれたん

だ。2人は今どこにいるんだ？」

そう言っているんな方向を向くとそこには緑色の魔法少女の格好をして緑色の八芒星があるステッキをもってるソルが空を飛んで弾幕を放っていた。それを拳だけで好美は弾き返していた。

嘉秀「ナニアレ」

ハサン「私にもわかりません」

2人は宇宙を背負った。

その瞬間、士郎の侵食固有異界が閉じた

ソル「なっ！まさか士郎がやられたのか」

シキ「いや違うぞ」

嘉秀「監督役彼はどうしたんだ？」

シキ「事情説明するからこつちやこい」

そう言って全員集めると。

シキ「まずお前なにその姿？」

そう言ってソルを指さした。

ソル「これかい？これはマジカル??エメラルドだけど？」

シキ「まあいいやとりあえず監督役の権限で姉小路好美のマスター権限の放棄を命令させてもらう、それに復帰も許さない一様俺が保護してもいいぜこれに拒否権はない。異論あるか？あるなら俺が戦うが」

嘉秀「放棄したら好美さんは狙われないのか？」

シキ「Eそxのa通cりtりlりy」

嘉秀「好美さんはどうする」

好美「私はもう聖杯は必要ないわ」

シキ「ほんじゃ、お前とアレのパス切るぞ」

そう言って好美に触れようとした瞬間、空から黄金に輝く矢が落とされそして街の外から津波が押し寄せた。